兵庫県文化財調査報告　第255冊

加古川市

北谷・中西台地遺跡

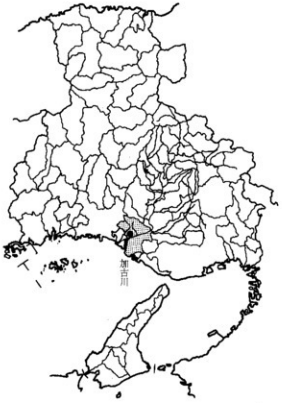
（主）高砂北条線道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

2003年3月
兵庫県教育委員会

加古川市

北谷・中西台地遺跡

（主）高砂北条線道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書



2003年３月
兵庫県教育委員会

例　　言

1．本書は、兵庫県加古川市東神吉町神吉字北谷に所在する北谷遺跡及び加古川市西神吉町中西に所在する中西台地遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。

2．発掘調査及び整理作業については、兵庫県加古川土木事務所の依頼を受けて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。

3．整理作業は、平成14年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。

4．遺物写真の撮影にあたっては、株式会社イーストマンと委託契約を交わして、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。

5．本書に使用した方位は国土座標V系を基準にし、水準は東京湾平均海水準（T.P.）を使用した。また、各遺構図面で使用している方位は座標北を指す。

6．本書に使用した遺跡分布図等の地図については、国土地理院発行２万5000分の１地形図「加古川」図幅を使用した。

7．本書の執筆及び編集等の整理作業については、森本貴子・高田めぐみ・高瀬敬子の補助を得て、山田清朝・中川　渉・中村　弘・深江英憲が行った。なお、各執筆担当は本文目次に記した。

8．本書の調査成果は、既に現地説明会資料等で公表している。本報告では若干内容を異にする部分もあるが、本書が現時点における最新の担当者の見解と理解されたい。

本 文 目 次

第1章　はじめに
第1節　調査の経過……（中川　渉）　1
第2節　整理の経過……（深江英憲）　6
第3節　遺跡をとりまく環境……（深江）　7

第2章　北谷遺跡の調査成果
第1節　遺跡の概要……（中村　弘）　11
第2節　土層……（中村）　11
第3節　遺構……（中村）　11
第4節　遺物……（中村）　13

第3章　中西台地遺跡の調査成果
凡例
第1節　基本層序……（深江）　14
第2節　弥生時代の遺構と遺物……（深江）　14
第3節　奈良～平安時代の遺構と遺物……（深江）　16
第4節　室町～戦国時代の遺構と遺物……（深江）　21
第5節　近世以降の遺構と遺物……（深江）　26

第4章　おわりに……（深江）　29

挿図目次

第1図　平成6年度確認調査トレンチ配置図……2
第2図　中西台地遺跡全面調査調査区位置図……4
第3図　整理作業風景……6
第4図　北谷・中西台地遺跡と周辺の主要遺跡分布図……9
第5図　北谷遺跡出土遺物……13

表目次

表1　北谷・中西台地遺跡と周辺の主要遺跡地名表……10

図版目次

図版1　遺跡の位置
図版2　北谷遺跡　全体図・溝断面図
図版3　北谷遺跡　土層断面図
図版4　北谷遺跡　SB01
図版5　北谷遺跡　SX01
図版6　中西台地遺跡　調査区割図
図版7　中西台地遺跡　調査区断面図
図版8　中西台地遺跡　遺構配置図①
図版9　中西台地遺跡　遺構配置図②
図版10　中西台地遺跡　遺構配置図③
図版11　中西台地遺跡　弥生時代の遺構
図版12　中西台地遺跡　奈良～平安時代の遺構①
図版13　中西台地遺跡　奈良～平安時代の遺構②
図版14　中西台地遺跡　奈良～平安時代の遺構③
図版15　中西台地遺跡　室町～戦国時代の遺構①
図版16　中西台地遺跡　室町～戦国時代の遺構②
図版17　中西台地遺跡　室町～戦国時代の遺構③
図版18　中西台地遺跡　室町～戦国時代の遺構④
図版19　中西台地遺跡　室町～戦国時代の遺構⑤
図版20　中西台地遺跡　室町～戦国時代の遺構⑥
図版21　中西台地遺跡　室町～戦国時代の遺構⑦
図版22　中西台地遺跡　近世以降の遺構①
図版23　中西台地遺跡　近世以降の遺構②
図版24　中西台地遺跡　近世以降の遺構③
図版25　弥生時代の遺構出土土器
図版26　奈良～平安時代の遺構出土土器①
図版27　奈良～平安時代の遺構出土土器②
図版28　室町～戦国時代の遺構出土土器①
図版29　室町～戦国時代の遺構出土土器②
図版30　室町～戦国時代の遺構出土土器③
　　近世以降の遺構出土土器
図版31　出土瓦①
図版32　出土瓦②・土製品
図版33　石製品①
図版34　石製品②
図版35　金属器

写真図版目次

図版１　遺跡周辺遠景（北側上空から）
　　遺跡周辺遠景（南側上空から）

北谷遺跡

図版２　調査区全景（南東から）
　　調査区全景（北西から）
図版３　調査区全景（北東から）
　　ＳＢ01全景（北東から）
図版４　ＳＸ01検出状況（南西から）
　　ＳＸ01小口部検出状況（南西から）
　　ＳＸ01掘削状況（南西から）
図版５　ＳＸ01横断面（北西から）
　　ＳＸ01北西隅縦断面（南西から）
　　ＳＸ01南東側縦断面（南西から）

中西台地遺跡

図版６　遺跡遠景（北側上空）
　　遺跡遠景（西側上空）
図版７　遺跡近景（南側上空）
　　遺跡近景（北側上空）
図版８　Ｂ地区　全景（南から）
　　Ｂ地区　柱穴列断ち割り状況
図版９　Ｂ地区　全景（北から）
　　Ｂ地区　北半部（北から）
図版10　Ｂ地区　ＳＤ06・ＳＤ10畦Ｄ－Ｄ'断面（西から）
　　Ｂ地区　ＳＤ06畦Ｄ－Ｄ'断面（西から）
　　Ｂ地区　ＳＤ06畦Ｅ－Ｅ'断面（東から）
図版11　Ｂ地区　柱穴列（Ｐ１）断ち割り
　　Ｂ地区　柱穴列（Ｐ２）断ち割り
　　Ｂ地区　柱穴列（Ｐ３）断ち割り
　　Ｂ地区　柱穴列（Ｐ４）断ち割り
図版12　Ｃ－24～28地区　全景（南から）
　　Ｃ－24・25地区　全景（北から）
図版13　Ａ－１～７地区部分　全景（南から）
　　Ａ－５～18地区部分　全景（北から）
図版14　Ａ－１～４地区　近景（南から）
　　Ａ－４～７地区　近景（北から）
図版15　Ａ－７～18地区　全景（北から）
　　Ａ－７～16地区　全景（南から）
図版16　Ａ－14～18地区　全景（南から）
　　Ａ－22～28地区　全景（北から）
図版17　Ａ地区ＳＤ01・02（北東から）
　　Ａ地区ＳＤ01断面（北東から）
　　Ａ地区ＳＤ01畦断面（北東から）
図版18　Ａ地区ＳＤ01土器出土状況
　　Ａ地区ＳＫ01畦断面（南西から）
　　Ａ地区ＳＫ01（南から）
図版19　Ａ地区ＳＫ02断面（南から）
　　Ａ地区ＳＫ02完掘状況（南から）
　　Ａ地区ＳＫ03土器出土状況（西から）
図版20　上：Ａ地区ＳＤ03完掘状況（北東から）
　　中：ＳＤ03畦ａ－ａ'断面（南から）
　　左下：ＳＤ03畦ｂ－ｂ'断面（南から）
　　右下：ＳＤ03畦ｃ－ｃ'断面（南から）
図版21　Ａ地区ＳＫ12・ＳＡ01検出状況（南から）
　　Ａ地区ＳＡ01検出状況（北から）
図版22　上：Ａ地区ＳＫ12検出状況（南から）
　　下：ＳＥ01断ち割り状況（南から）
図版23　Ａ地区ＳＤ06完掘状況（北から）
　　Ａ地区ＳＤ06完掘状況（南から）
図版24　Ａ地区ＳＤ06Ａ－Ａ'断面（北から）
　　Ａ地区ＳＤ06Ｂ－Ｂ'断面（南から）
　　Ａ地区ＳＤ06畦Ｃ－Ｃ'断面（南から）
図版25　Ａ地区ＳＤ06内ＳＸ01・02検出状況（南から）
　　Ａ地区ＳＤ06内ＳＸ01（東から）
　　Ａ地区ＳＤ06内ＳＸ02（東から）
図版26　Ａ地区ＳＤ10完掘状況（南から）
　　Ａ地区ＳＤ10断面（西から）
　　Ａ地区ＳＤ10断面（東から）
図版27　Ａ地区ＳＫ07畦断面（南から）
　　Ａ地区ＳＫ08畦断面（北から）
　　Ａ地区ＳＫ13畦断面（南から）
図版28　Ａ地区ＳＤ06南側土坑群（南西から）
　　Ａ地区ＳＫ09畦断面（南から）
　　Ａ地区ＳＫ09畦断面（東から）

図版29　A地区ＳＫ09礫・炭集積状況（西から）
A地区ＳＫ09完掘状況（西から）
A地区ＳＫ10完掘状況（西から）
図版30　A地区ＳＤ07・近世水路（南から）
A地区ＳＫ14検出状況（南から）
A地区ＳＫ14完掘状況（西から）
図版31　A地区ＳＤ06完掘後の１コマ
A地区現地説明会風景
A地区現地説明会当日の１コマ
図版32　弥生時代の土器
図版33　奈良～平安時代の遺構出土土器①
図版34　奈良～平安時代の遺構出土土器②
図版35　奈良～平安時代の遺構出土土器③
奈良～平安時代の遺構出土土器④
図版36　奈良～平安時代の遺構出土土器⑤
室町～戦国時代の遺構出土土器①
図版37　室町～戦国時代の遺構出土土器②
図版38　室町～戦国時代の遺構出土土器③
室町～戦国時代の遺構出土土器④
図版39　室町～戦国時代の遺構出土土器⑤
近世以降の土器
図版40　瓦①（軒丸瓦・軒平瓦）
図版41　瓦②（平瓦：表）
瓦②（平瓦：裏）
図版42　土製品
石製品①
図版43　石製品②
図版44　金属器

第１章　はじめに

第１節　調査の経過

１．北谷遺跡の調査にいたる経過

兵庫県加古川土木事務所は主要地方道路高砂北条線道路改良事業を計画したが，その内の加古川市西神吉町宮前から東神吉町神吉にいたる区間における埋蔵文化財の有無について照会があった。そこで，それに先立ち，平成４年２月５日に分布調査を行い，遺物の散布が認められたので，平成５年１月28日～１月29日に確認調査を行った。その結果，柱穴と若干の土器片が出土したため全面調査を行った。

遺跡調査番号　930177（全面調査）調査担当者　　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
　　調査第３班　　吉識雅仁・中村　弘
調査期間　　平成５年12月27日～平成６年１月27日
調査面積　　540㎡

２．中西台地遺跡の調査にいたる経過

兵庫県加古川土木事務所は加古川市東神吉町神吉地内において，主要地方道路高砂北条線道路改良事業を計画した。事業は現集落の西側に４車線のバイパスを新設するもので，交通安全と渋滞の緩和を図るものである。

事業予定地内には加古川市遺跡分布地図に記載された周知の遺跡である中西台地遺跡（遺跡番号13）が存在する。同遺跡では過去に弥生時代の土器や石器が採集されている他，事業予定地の西約100mには白鳳時代～平安時代の中西廃寺が，東約300mには戦国時代の神吉城跡が存在する。

中西台地遺跡においては，平成２年度に加古川市教育委員会が県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財の確認調査を行っており，この時の調査箇所では弥生時代の土器・石器は出土したものの，遺構は削平によって失われていた。

・平成５年度の調査（Ｂ地区）

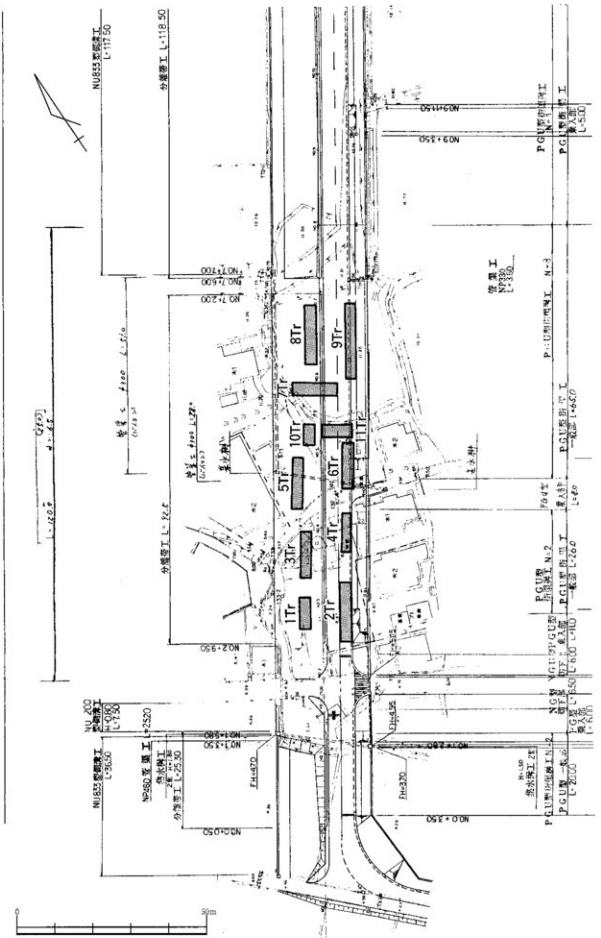
４車線の路線の内，東側２車線を先行工事することになったため，平成６年１月12日付け，加土第3437号の依頼に基づいて掘削を伴う詳細分布調査を実施し，埋蔵文化財が認められた範囲について引き続き発掘調査を行った。

調査を行ったのは，台地先端の傾斜変換点にあたるセンター杭№８付近から北へ№16までの区間である。調査の結果，弥生時代・奈良時代・中世の遺構・遺物を検出した。

弥生時代の遺構は台地先端の調査区南端で見つかった大型柱穴４基のみである。

中世の遺構としては幅４～６mの堀状の溝が約50mの間隔をおいて見つかり，室町時代の屋敷地の存在が想定された。

奈良時代に関しては遺物は出土したものの，遺構は見つからなかった。



第１図　平成６年度確認調査トレンチ配置図

遺跡調査番号　930189
調査担当者　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
　調査第３班　山田清朝・所崎明雄
調査期間　平成６年１月22日～平成６年１月28日
調査面積　1,705㎡

・平成６年度の調査

前年度に調査を実施した箇所より南側の、台地先端から段丘崖下にいたる斜面部分（センター杭№２～６＋10）について、平成６年11月16日付け、加土第2885号の依頼に基づき、確認調査を実施した。

路線内には地元で「那須の与一さん」と呼ばれる石棺仏が祀られており、五輪塔の破片なども採集されている。石棺仏などは地元の信仰の対象となっており、現在は隣接地へ移転されている。調査は11箇所のトレンチを設定して行い、対象範囲のうち５Tr・７Trを中心に概ね北半部で遺構・遺物の存在を認めた。

遺跡調査番号　940260
調査担当者　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
　調査第３班　山田清朝・三原慎吾
調査期間　平成６年11月16日
調査面積　105㎡

・平成７年度の調査（C地区）

前年度の確認調査で調査対象となった範囲（センター杭№３～５）のうち東側２車線について、平成７年６月２日付け、加土第775号の依頼に基づき、全面調査を実施した。

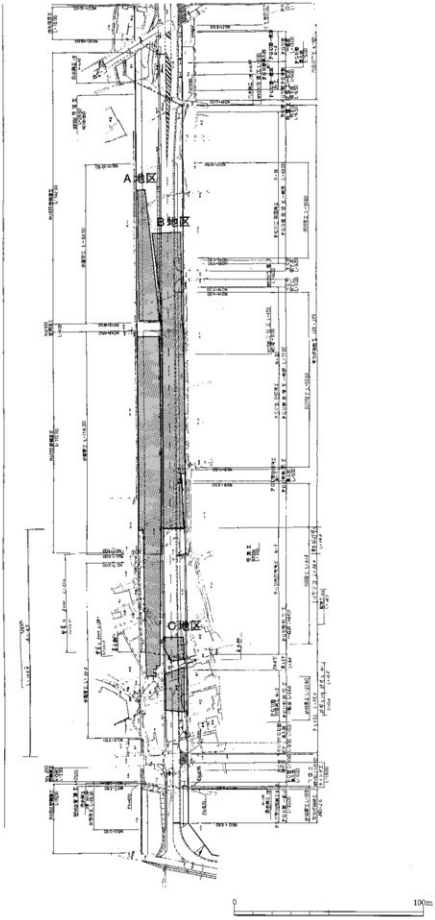
対象区域内には現道が存在するため、道路を挟んで南北２地区に分けて調査した。その結果、平安時代の溝などを検出した。

遺跡調査番号　950139
調査担当者　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
　調査第１班　中川　渉・水鳴正稔
調査期間　平成７年６月27日～平成７年７月19日
調査面積　301㎡

・平成11年度の調査（A地区）

調査を先行実施した東側２車線は供用開始となった。一方、未実施のまま残されていた西側二車線について、平成11年３月18日付け、加土第3614号の依頼に基づき、全面調査を実施した。

調査区の南端は平成７年度調査区西端のセンター杭№４付近で、もと「那須の与一さん」があった至近の場所にあたる。北端は平成５年度調査区よりさらに北側のセンター杭№17付近である。途中現道が存在するセンター杭№13～14では、道路部分を調査区から除外した。調査の結果、弥生時代と奈良～平安時代・室町～戦国時代の遺構・遺物を検出した。



第２図　中西台地遺跡全面調査区位置図

奈良～平安時代に関しては調査区南端で溝を検出し、埋土から瓦・円面硯など中西廃寺関連の遺物が出土した。

室町～戦国時代の遺構は、平成５年度の調査で見つかった堀が調査区内で直角に折れ曲がってつながり、方形居館であることが判明した。

弥生時代に関しては遺物は出土したものの、遺構は見つからなかった。

調査の成果は７月14日に地元説明会を開催・公開した。

遺跡調査番号　990138

調査担当者　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
調査第３班　中川　渉・深江英憲

調査期間　平成11年５月11日～平成11年７月23日

調査面積　1,938㎡

第２節　整理の経過

北谷・中西台地遺跡の整理作業は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（荒田事務所）及び魚住分館おいて、平成14年度の単年度での実施となった。

平成14年度の整理作業および体制

実施した作業は、土器の洗浄、ネーミング、接合・補強、実測、復元、木器保存処理、金属器保存処理、遺物の写真撮影、図面補正、トレース、写真整理、レイアウト、報告書の刊行である。

整理担当職員　整理保存班　主査　加古千恵子
主査　中村　弘
主任　深江英憲
調査第２班　主査　山田清朝
企画調整班　主査　中川　渉

整理技術嘱託員　森本貴子　香川フジ子　西口由紀　島村順子　木村淑子　鈴木まき子　中西睦子
高田めぐみ　宮野正子　高瀬敬子　藤井光代　三島重美
（木器保存処理）　多賀直子　川上　緑　小林俊子　渡辺二三代
（金属器保存処理）　西野淳子　三好綾子　藤井光代　三島重美

第３図　整理作業風景

第３節　遺跡をとりまく環境

１．遺跡の立地

加古川市は、市域の西半部に広がる流文岩及び花崗岩質の低山地・丘陵と、市域東半部及び低地に広がる神戸層群と大阪層群の堆積層を基盤とした地形に立地している。その中央部を流れる加古川は、西側の低山地・丘陵や東側に形成された大阪層群の台地を削り段丘崖を形成し、低地には土砂を堆積させ、流域に県下最大の沖積平野を形成している。加古川流域で形成された洪積台地は、特に下流域において西岸に展開する沖積平野の北限を限るように延びている。

北谷・中西台地遺跡は、その加古川下流域の西岸に形成された段丘上に立地し、特に中西台地遺跡の南端部付近は、低地に向かって急激に落ちる段丘崖となっている。

２．北谷・中西台地遺跡と周辺の遺跡

北谷・中西台地遺跡が立地する段丘上及びその周辺の低山地や沖積平野では、古くから多くの遺跡が確認されている。

加古川流域における旧石器時代の遺跡は段丘上の池周辺で多く確認されている。特に志方町周辺において遺物の散布が見られ、平荘湖周辺や横山遺跡等ではナイフ型石器が出土している。また、縄文時代の遺跡は発見例が少ないが、志方町東中遺跡や八幡町宮山遺跡では後期の土器片が採集され、西神吉町岸遺跡では晩期の土器が出土している。

弥生時代では、岸遺跡や東神吉町砂部遺跡が縄文晩期から継続して集落を形成し、砂部遺跡に隣接する東神吉遺跡も前期を中心とする遺跡として知られる。これら加古川下流域右岸の沖積地から低位段丘上に形成された遺跡は中期以降も継続し、さらに中期段階にはじまる遺跡が段丘上でも形成されるようになる。中西台地遺跡は検出遺構は少ないものの、混入する遺物の状況から集落が形成されていたことが想定できる。また、加古川左岸の沖積地では加古川町溝之口遺跡が中期段階で形成され、後期以降古墳時代まで継続している他、そのやや南側には栗津遺跡も確認されている。

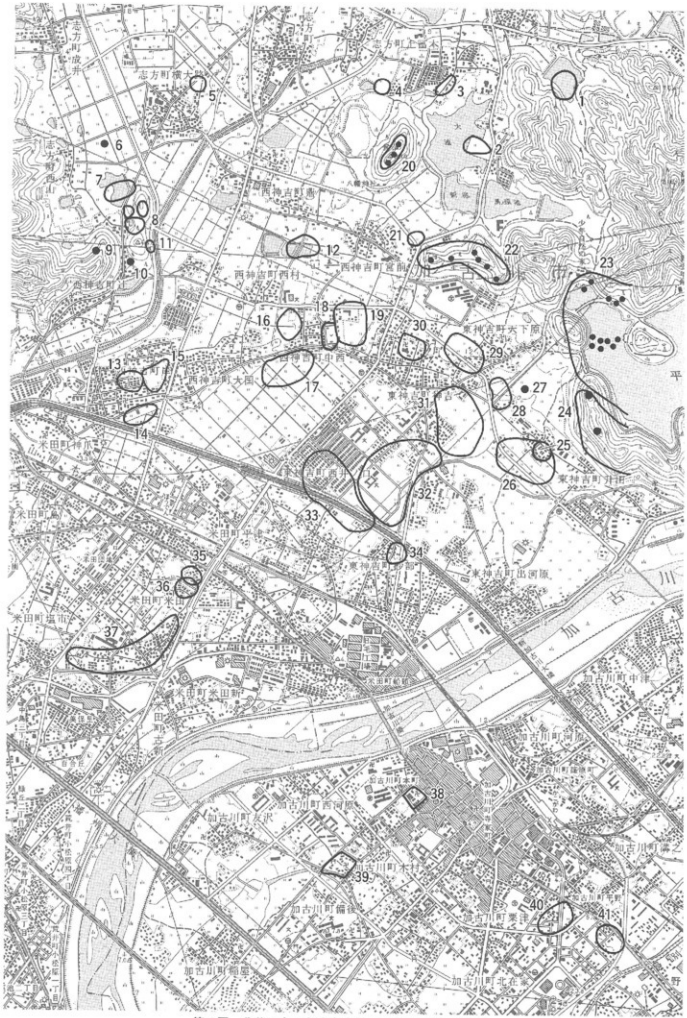
古墳時代では、極初期の段階の古墳として、東神吉町神吉山５号墳が加古川右岸の丘陵上に築造され、左岸の日岡山古墳群や西条古墳群でも大型の前方後円墳等が築造される。集落としては、左岸の溝之口遺跡において竪穴住居跡が発見され、玉作り工房跡の可能性を窺わせる。また、右岸では砂部遺跡において５世紀後半頃の掘立柱建物が発見され、伽耶地方と関わりの深い遺物も出土している。６世紀以降には急激に古墳が増加して群集墳を形成する。加古川右岸では、池尻支群・一つ山支群・坂池支群・カンチ池支群・弁天池支群・升田池支群からなる計約70基の古墳が点在する平荘湖古墳群や、その南側に13基の古墳群が点在する升田山古墳群が確認されている。

奈良時代では、縄文時代以降連綿と集落を形成している砂部遺跡や、古代山陽道の賀古駅家跡とされる野口町古大内遺跡があげられる。また、中西台地遺跡の南西側には中西廃寺が隣接する。中西廃寺は、その詳細については不明であるが、巨大な自然石の中央に円形孔のくり込みをした心礎をはじめ、廃寺の南側の台地直下にある「石井の清水」の湧出口として転用されている心礎・礎石・露盤等が、寺の痕跡を伝えている。また、中西廃寺は出土軒瓦の資料、あるいは現薬師堂の南側に建っていた十三重の石造層塔に刻まれた「貞和三年」(1347年)の銘文から、７世紀末頃の創建から平安時代、そして中世まで継続したと考えられる。

中世では、加古川流域の微高地、あるいは段丘上に城館跡が点在している。特に中西台地遺跡の東側には、室町時代に神吉氏の好祖神吉元頼が築城したとされる神吉城がある。現在の常楽寺の境内は、城の中の丸（古城）にあたり、天守閣が存在したとされる。また、その北側の田地には二の丸が、東西の宅地・寺地にはそれぞれ東の丸・西の丸が想定されている。後述する中西台地遺跡の調査成果として一辺約50mの方形居館跡に伴う堀と想定される遺構を確認しているが、時期的にも神吉城と重なり、その関わりが重要視されるところである。

参考文献

『加古川市史』第１巻　1989
『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』　1982　兵庫県教育委員会



第４図　北谷・中西台地遺跡と周辺の主要遺跡分布図

第１表　北谷・中西台地遺跡と周辺の主要遺跡地名表

	遺跡名	所在地	種類	時代
1	畑谷池遺跡	加古川市志方町投松	散布地	～縄文
2	宮前大池遺跡	加古川市西神吉町宮前	散布地	縄文
3	横山遺跡	加古川市志方町西中	集落跡	縄文
4	上富木遺跡	加古川市志方町上富木	集落跡	縄文～平安
5	横大路遺跡	加古川市志方町横大路	散布地	縄文
6	横大路古墓	加古川市志方町横大路	その他の墓	中世
7	峠の池遺跡	加古川市志方町峠	散布地	縄文
8	峠の池２遺跡	加古川市志方町横大路	集落跡	弥生～平安
9	横大路古墳	加古川市志方町横大路	古墳	古墳
10	辻古墳	加古川市神吉町辻	古墳	古墳
11	大国山遺跡（辻中世墓）	加古川市西神吉町辻	その他の墓	中世
12	新懸池遺跡	加古川市西神吉町西村	散布地	旧石器
13	岸遺跡	加古川市西神吉町岸	集落跡	縄文～弥生
14	岸南遺跡	加古川市西神吉町岸	集落跡	弥生
15	岸城跡	加古川市西神吉町岸	都城跡	中世
16	西村遺跡	加古川市西神吉町西村	集落跡	弥生～奈良
17	中西低地遺跡	加古川市西神吉町中西	集落跡	弥生～室町
18	中西廃寺	加古川市西神吉町中西	社寺跡	奈良
19	中西台地遺跡	加古川市西神吉町中西	集落跡	弥生～室町
20	宮山１～３号墳	加古川市西神吉町宮前	古墳	古墳
21	北谷遺跡	加古川市東神吉町神吉	その他の遺跡	弥生～中世
22	神吉山１～５号墳	加古川市東神吉町神吉	古墳・その他	弥生・古墳
23	池尻古墳群	加古川市平荘町池尻・又平新田他	古墳	古墳
24	升田山１～10号墳	加古川市東神吉町升田	古墳	古墳
25	佐伯寺跡	加古川市東神吉町升田	社寺跡	平安
26	升田遺跡	加古川市東神吉町升田	集落跡	奈良
27	天下原古墳	加古川市東神吉町天下原	古墳	古墳
28	天下原遺跡	加古川市東神吉町天下原	集落跡	弥生～奈良
29	神吉遺跡	加古川市東神吉町神吉	集落跡	弥生
30	神吉城跡	加古川市東神吉町神吉	都城跡	中世
31	神吉南遺跡	加古川市東神吉町神吉	集落跡	弥生～奈良
32	砂部遺跡	加古川市東神吉町砂部	集落跡	縄文～奈良
33	東神吉遺跡	加古川市東神吉町西井ノ口	集落跡	弥生～古墳
34	砂部構居跡	加古川市東神吉町砂部	都城跡	中世
35	平津構居跡	加古川市米田町平津	都城跡	中世
36	平津遺跡	高砂市米田町北川	城館跡	室町
37	米田遺跡	高砂市米田町米田	集落跡	弥生～室町
38	加古川城跡	加古川市加古川町本町	都城跡	中世
39	石弾城跡	加古川市加古川町木村	都城跡	中世
40	粟津遺跡	加古川市加古川町粟津	集落跡	弥生～古墳
41	平野遺跡	加古川市加古川町平野	集落跡	弥生

第２章　北谷遺跡の調査成果

第１節　遺跡の概要

北谷遺跡は、中西台地遺跡の北東約300mに位置する。標高は約12.3mで、全体に北から南に緩やかに傾斜している。発掘調査はおよそ南北方向に25m、東西方向に23m、面積約580㎡を対象に行った。調査の結果、掘立柱建物１棟、木棺墓１基、溝５条、水田（畦畔・鋤溝）が検出された。

出土遺物は少なく、28ℓ入りのコンテナに１箱が出土したにすぎない。種類としては須恵器、土師器、白磁、染付、陶器の土器類のほか、瓦、鉄製品がある。

第２節　土層（図版３）

遺跡は台地上に位置するため、遺構面が比較的浅く、層の堆積は少ない。特に北側については現在の耕土が直接遺構検出面を覆っていた。

遺跡内で最も下層にあるのは明黄灰色シルト質極細砂層（第７層）で、台地を構成する層である。若干北から南の方向に傾いている。その上には暗灰褐色シルト（第６層）が、調査区南西側に見られるベース層（第７層）のくぼみ部分を埋めるように堆積し、溝の埋土にもなっている。

さらに上層には暗灰色シルト層（第５層）、灰色極細砂混じりシルト層（第４層）がほぼ水平に堆積する。これらの層からは、須恵器（杯B、へら切りや糸切り底の椀、甕、こね鉢）、土師器（鍋）、白磁（玉縁口縁のもの）、陶器（堺焼か明石焼の擂鉢）、施釉陶器（江戸時代）、染付、瓦が出土した。これらの出土遺物により、これらの層は平安時代から江戸時代にかけて堆積したものと考えられ、特に中世の遺物がやや目立って出土した。

これらの層の上には灰白色極細砂質シルト（第３層）が、調査区北端をのぞくほぼ全域に水平に堆積している。その上には現耕作土（第２層）が調査区全体を覆い、さらにその上には調査区北西端に盛り土（第１層）が認められる。

第３節　遺構（図版２・４・５　写真図版２～５）

１．掘立柱建物（SB01）

調査区のほぼ中央で検出された。桁行２間（約4.8m）、梁行１間（約3.2m）で、棟方位を南北、N－0°－Eとする建物である。柱穴の平面形は円形を呈し、直径は平均約35cmである。深さは前平されているため、平均約20cm程度と浅い。柱穴からは奈良時代～平安時代の須恵器（杯B蓋）が出土しているが（第５図－116）、建物の時期を示しているかどうかは明らかにできない。柱痕は暗灰色シルト質極細砂で、柱穴の埋土は黄灰色シルト質極細砂、灰黄色極細砂質シルト層で、唯一Ｐ６のみ柱穴最下部に灰色シルト質極細砂が埋められていた。

また、SB01のさらに南側には東西方向に柱穴が検出されたが、若干離れており、かつ方位がややずれているので、同一の建物と判断しなかった。

2．木棺墓（SX01）

調査区の北側で検出された。木棺を直葬したものである。主軸の方向は西北西－東南東で、N－76°－Wを向く。掘方は長さ2.26m、幅は最大で1.16m、最小で1.03m、深さ0.43m、木棺の内法は、長さ1.26m、幅は最大で0.4m、最小で0.33m、深さ0.34mを測る。掘方、木棺ともに東側がやや広く、頭位が東側であった可能性が考えられる。

木棺の痕跡が灰白色極細砂層として明瞭に確認できた。その結果、木棺は底板の上に小口板を立て、それを挟み込むようにして長側板を立てていることが明らかとなった。蓋板については落ち込んだ状況さえも確認できなかった。長側板、小口板は共に、土圧によって内側へ傾いている。

各部材の大きさは、底板が長さ1.87m、幅0.61m、東側小口板が幅40cm、現存高18cm、西側小口板が幅33cm、現存高23cmを測る。

掘方内の埋土は、底板の下に薄く灰黄色極細砂混じりシルト（第５層）が置かれており、側板の外側には下から順に、しまりの弱い灰黄色シルト質極細砂（第４層）、次にしまりの強い黄灰色シルト混じり極細砂（第３層）が置かれている。棺内の埋土には下から順に、しまりの強い灰黄色極細砂（第６層）、黄灰色極細砂（第７層）が堆積している。

遺物は出土しておらず、時期は比定できない。

3．溝（SD01～05）

SD01から05までの５条が検出された。いずれも調査区の南側から東側に位置する。SD01・05以外は勾溝と切り合い関係にあり、鍵溝が溝を切っている。

埋土はSD05以外が暗灰色シルト質であり、同じ色調、性質であることから、同時期である可能性が高い。これらの溝から出土した遺物は弥生時代から古墳時代前期の土器片であり、溝の時期を示す可能性が高い。

SD01

調査区の東側端で検出された。検出全長2.6m、幅1.26m、深さ0.24mを測る。断面形は皿状を呈す。埋土は３層が確認でき、下から順に暗灰色シルト質極細砂（第３層）、黄灰色シルト混じり極細砂（第２層）、暗灰褐色極細砂（第１層）である。第１層の下側には炭層が挟まれていた。

なお、遺物は土師質の土器片が出土したに過ぎない。

SD02

調査区の南側で検出された。検出全長4.5m、幅は最大で1.06m、深さ６cmを測る。検出平面形は細長いコの字形を呈しており、断面形は底が平らな浅い皿状を呈す。埋土は暗灰褐色シルト質極細砂である。遺物は出土しなかった。

SD03

調査区の南端で検出された。検出全長4.1m、幅は最大で1.12m、深さ４cmを測る。平面形は細長いコの字形を呈す。SD02と向かい合うような配置であるが、南辺が若干ずれている。溝の断面形は底が平らな皿状を呈す。埋土は暗灰色シルト質極細砂である。遺物は土師質の土器片が出土したに過ぎない。

SD04

調査区の南西側で検出された。検出全長2.5m、幅0.8m、深さ４cmを測る。平面形はSD03の北西角の外側を囲むようにL字形に屈曲している。断面形は浅い皿状を呈す。遺物は出土しなかった。

SD05

調査区の南東側中央で、溝の先端の一部のみが検出された。検出全長0.84m、幅0.88m、深さ5cmを測る。断面形は浅い皿状を呈している。埋土は灰褐色シルト質極細砂である。遺物は土師質の土器片と丸瓦が出土した。

4．水田

鋤溝

調査区の南側で検出された。北側については削平が遺構面まで及び、検出されなかった。鋤溝の方向は東西方向のものが中心であるが、調査区東端と西側の両側で南北方向（N－22°－E、N－7°－E）のものが検出されており、その間隔は約15mを測る。また、東西方向の鋤溝も調査区南側のものとやや中央よりの部分とでは方向が若干異なっており、前者がN－73°－W、後者がN－60°－Wである。

遺物は須恵器（杯B蓋）、土師器鍋が出土した。

畦畔

調査区の北側で検出された。現代の盛土の直下で検出され、また、耕土が江戸時代の遺物を含む層（4・5層）を覆っていることから、近現代のものと考えられる。検出されたのは全長24m、幅1.1m、高さ40cmを測る。方位はN－72°－Wで、鋤溝の方向とほぼ合っているが、特に南側で検出されたものにより近い方向を示している。

第4節　遺物

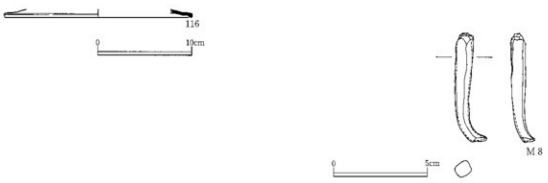
須恵器、土師器、白磁、染付、陶器の土器類のほか、瓦、鉄製品が出土している。しかし、いずれも小片であり、図化できたものは土器1点と鉄製品1点にすぎない。

須恵器（116）

116は杯B蓋である。器高は低く、平らである。端部は短く下方に折り返すのみである。

鉄製品（M8）

M8は釘である。断面形は方形を呈する。頭部は不整形に尖り気味である。先端部は彎曲している。



第5図　北谷遺跡の出土遺物

第３章　中西台地遺跡の調査成果

凡例

１．調査区の設定（図版６）

中西台地遺跡は、分布調査及び全面調査を平成５年度、平成７年度及び平成11年度の３箇年度に分けて調査した。其々、道路の東半部と西半部に分かれるため、便宜的に平成11年度の調査区をA地区、平成５年度の調査区をB地区、平成７年度の調査区をC地区とした。また、調査区の特徴から非常に総延長が長いため、南北の調査区を機械的10mピッチで区切って、小地区設定を行った。従って、遺構の配置説明では、A－10地区・B－20地区・C－25地区等のように呼称する。

２．報告書遺構名

遺構の名称及び番号については、各調査ごとに個別に付けていたが、最も遺構検出数の多いA地区に従ってそのまま用い、B・C調査区の遺構名を一部振り直した。遺構名の記号については属性を示すアルファベット〔SA：構（ここでは柱穴列）、SD：溝、SK：土坑等〕を付し、続けて属性ごとに遺構番号を振った。ただし、報告書中の掲載外となった遺構は欠番となるため、遺構番号に抜けが生じていることをご容赦されたい。

第１節　基本層序（図版７）

中西台地遺跡の調査区付近は、段丘上に広がる水田及び畑地であった。地形は大半が標高12m程の平坦地で占めるが、18区以南では低地に向かって急激な段を形成しており、その部分にも旧耕土（２層）や床土（３層）が見られる。包含層（４層）及び遺構検出面は、それら後世の耕作で削平されており、最も浅い部分では耕土直下で遺構面が確認できる状況である。また、高位置で検出した遺構に比べ、低位置で比較的古い遺構が検出でき、奈良～平安時代の遺物を包含する遺構（５層）付近では、耕土及び床土直下にも係わらず、比較的良好な状態で遺構が確認できた。

第２節　弥生時代の遺構と遺物

１．遺構

本調査においてほぼ確実に弥生時代の遺構として検出したのは、柱穴列のみである。ただし、周辺で検出した後世の遺構及び包含層中からは比較的多くの弥生土器が出土していることから、本来は相当数の遺構があり、後世の削平によって消滅したと考えられる。

柱穴列SA02（図版11　写真図版８・11）

遺構はB－16地区に位置する。遺構は４基の柱穴（P１～P４）がほぼ一直線に並んだものであるが、周囲が用水路等による掘削を受けていることから、対面するような柱穴が残存しておらず、建物の復元

には至らなかった。柱穴は径約70cm、深さ約45cmを測り、比較的大型である。

遺物はP２から高杯の脚部（１）、有孔土製円板（112）が出土した。

２．遺物

弥生時代の遺物は一部を除いて殆ど後世の遺構内に混入したものである。

柱穴列SA02

脚部（１）

小形高杯であろう。ラッパ状を呈し、端部は肥厚して面をなす。柱状部には６箇所の円孔があり、裾部には15箇所、端部には12箇所に復元できる円孔を持つ。脚部径約7.5cm。

有孔土製円板（112）

弥生土器片を二次的に加工して使用したもので、紡錘車と考えられる。全体を円形状に加工し、中央部に穿孔を施す。直径約3.9cm、孔の直径0.4cm、厚さ0.5cm。

溝SD06

壺（２）

大きく開いた口縁部の一部である。口縁端部は断面三角形状に垂下して面をなす。上下端部にはキザミ、端面には上下各１条の凹線文の間に竹管を施す円形浮文を付す。胎土の状況から河内系と考えられる。口径約28.2cm。

甕（３）

上半部のみ図化できた。口縁部はやや穏の緩い「く」の字状を呈し、端部で僅かに面をなす。胴部外面は横方向のタタキで、内面はイタナデである。口縁部はヨコナデで仕上げる。口径約17.6cm。

鉢（４）

大型鉢の上半部である。体部はやや内彎気味に立ち上がり、無頸の口縁部は端部で帯状に拡張して面をなす。口径約34.6cm。

脚部（5,6）

５は低脚の高杯あるいは脚付き壺の台部であろう。ラッパ上を呈し、端部は拡張して面をなす。柱状部には６条の凹線文の後に４箇所の円孔を施す。裾部には約20箇所に円孔を施す。脚部径約12.6cm。

６は高杯である。円柱状の柱状部から短くラッパ状に開き、端部は拡張して面をなす。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のイタナデで仕上げる。脚部径約13.2cm。

台部（７）

台付き鉢である。僅かにラッパ状に開き、端部は肥厚して面をなす。裾部には５条の凹線文を施す。外面はナデ及びヨコナデ、内面は横方向のイタナデである。脚部径約22.3cm。

第３節　奈良～平安時代の遺構と遺物

１．遺構

奈良～平安時代の遺構は、調査区の南側の24地区以南で集中的に検出した。遺構の一部は現代の排水管等の埋設物で攪乱を受けているものの、溝・土坑等が確認できた。溝・土坑共に時期的には近接しているが、検出状況からみて、先行する溝の埋没後に土坑が形成された事が窺える。

溝SD01・SD02（図版12・13　写真図版12・17・18）

遺構はA－24～26地区に位置し、遺構の一端がC－25地区にまで延びることが確認できる。

SD01はC－25地区を起点にして、A－23～25地区方向へややカーブしながら、東から南西方向へ流れる。遺構の最も低い部分では上層部分がカットされ、旧耕土・床土が堆積する。最大幅約2.6m、最大深度約0.7mを測り、比較的大型の溝である。

遺物は土師器の托（42）、須恵器の皿（14,32,36）、坏（33,35,37）、蓋（34）、碗（38,44）、小碗（42,43）、鉢（39）、壺（15,40）、円面硯（45）、平瓦（102）、サヌカイト剥片(S1,S２）が出土した。

SD02はA－24地区からに南方向へ流れ、SD01がカーブする部分で合流する。削平等により、比較的浅い溝となっている。東側の掘り方がやや不明瞭だが、明確な落ち際が確認出来る部分で幅約1.5m、深度約0.4mを測る。

遺物は土師器の坏（46）、須恵器の碗（47）、坏（48）、短頸壺（49）、平瓦（103）が出土した。

土坑SK01（図版14　写真図版18）

遺構はA－26地区に位置し、遺構の南側でSD01と切り合い関係にある。遺構の規模及び形状は、両端の掘り方が調査区外にあり不明だが、床面形状及び断面観察から２条の溝状の落ちが確認でき、堆積状況から遺構内で若干の時間差が窺える。幅約1.7m、最大深度0.3mを測る。

遺物は平瓦（101）一点を図化したのみである。

土坑SK02（図版14　写真図版19）

遺構はA－25地区に位置し、遺構の西半部がSD01と切り合い関係にある。遺構の形状及び規模は、南半分が現代の排水口で攪乱を受けているが、直径約1.4m、最大深度0.3mを測る。

遺物は土師器の小皿（17）、須恵器の小碗（18）、坏（20）、壺（19）が出土した。

土坑SK03（図版14　写真図版19）

遺構はA－25～26地区に位置し、遺構のほぼ全体がSD01の埋土上に形成された浅い土器溜まり状の土坑である。遺構の形状及び規模は、遺構の中央部分で大きく攪乱を受けているが、東西に長い不定楕円形と考えられる。長軸幅約1.3m、最大深度0.1mを測る。

遺物は土師器の小皿（21,22,23,24）、坏（25）、須恵器の碗（27,28,29）、小碗（31）、皿（30）が出土した。

2．遺物

奈良～平安時代の遺物には、確認調査時に第5グリット（以下5G）で出土した土器（8～12）、または後世の遺構内に混入した遺物も含まれる。

確認調査5G

土師器小皿（8）

やや開き気味に短く立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。体部はヨコナデ、内面中心部をユビナデで仕上げる。底部はヘラ切り後ナデである。口径約8.4cm、器高1.7cm、底径約5.5cm。

土師器托（9,10）

ベタ高台から浅く大きく開く体部を持つ。外内面は共に回転ナデ、底部は回転糸切りである。9は口径約14.9cm、器高4.0cm、底径6.1cm。10は口径15.1cm、器高4.9cm、底径7.6cm。

須恵器小碗（11）

浅く内彎する体部を持つ。外内面は回転ナデで仕上げ、底部は回転糸切りである。口径約8.7cm、器高2.9cm、底径3.7cm。

須恵器皿（12）

底部のみ図化した。浅く大きく開く体部を持つものである。外内面は回転ナデで仕上げ、底部は回転糸切りである。底径5.5cm。

溝SD01

土師器皿（36）

浅く大きく開く体部で、口縁部でやや外反する。外内面は回転ナデで仕上げる。口径約13.2cm、器高2.1cm、底径約8.0cm。

土師器托（42）

底部のみ図化した。脚高のベタ高台で小型のものである。外内面は回転ナデで、底部は回転糸切りである。底径約4.7cm。

須恵器皿（14,32）

14はやや小型のもので、底部は欠損する。浅く大きく開く体部で、口縁端部で僅かに外反する。外内面は回転ナデで仕上げる。口径約4.7cm。

32は比較的大型のもので、口縁部は欠損する。ほぼ直立する高台を持つ。浅く大きく開く体部で、口縁部は外反する。外内面は回転ナデで、底部は回転ヘラ切りである。底径約8.9cm。

須恵器坏（33,35,37）

33は底部のみ図化した。断面方形の低い高台を持ち、体部は僅かに開きながら立ち上がる。外内面は回転ナデ、底部はヘラケズリで仕上げる。底径約9.6cm。

35はやや細身の高台を持ち、体部はやや開きながら立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。外内面は回転ナデで、底部は回転ヘラ切りである。口径約16.4cm、器高6.4cm、底径約9.5cm。

37は浅く開きながら立ち上がる体部を持つ。外内面は回転ナデである。口径約13.6cm、器高3.1cm、底径約9.8cm。

須恵器蓋（34）

口縁部付近のみの図化だが、低い宝珠ツマミを持つものである。浅い体部で、口縁端部に僅かなかえりを持つ。残存部分外内面は回転ナデである。口径約17.5cm。

須恵器碗（38,44）

38はベタ高台からやや内彎しながら立ち上がる体部を持つものである。口縁端部は僅かに外反し、丸くおさめる。外内面は回転ナデで仕上げ、底部は回転糸切りである。口径約14.7cm、器高5.4cm、底径約5.5cm。

44は底部のみ図化した。外内面は回転ナデで、底部は回転糸切りである。底径5.8cm。

須恵器小碗（43）

底部のみ図化した。見込み部分はやや凹みを持つ。外内面は回転ナデで、底部は回転糸切りの後にヘラで調整しているようである。底径4.1cm。

須恵器鉢（39）

口縁部付近のみ図化した。大きく内彎する体部を持ち、口縁端部は面取り後回転ナデで、体部外面は横方向のミガキで仕上げる。口径約19.3cm。

須恵器壺（15,40）

15は底部のみ図化した。厚みがあり、やや低く開く高台を持つ。外内面は回転ナデで、内面に灰かぶりが見られる。底部は回転ヘラ切りである。底径10.1cm。

40は頸部のみ図化した。肩部から頸部にかけて強く窄まり、口縁部は大きくラッパ状に開く。外内面は回転ナデで仕上げ、自然釉が付着する。

須恵器甕（41）

口縁部のみ図化した。強く窄まる頸部から大きく外反する。口縁端部は内へ強く拡張して面をなす。外内面はヨコナデである。口径約29.4cm。

須恵器円面硯（45）

上部付近のみ図化した。残存部分には、2箇所の透かしの痕跡があり、凡そ8箇所に復元できる。外内面は回転ナデで仕上げ、外面から海部にかけて一部に自然釉が付着する。口径約17.8cm。

瓦（102）

平瓦の小片である。凹部には布目、凸部には格子タタキが残る。端部付近はケズリによって先端から凸部側にかけて「L」字状の面取りが施される。

石器（S1,S2）

S1,S2はともにサヌカイト製の剥片である。一部加工痕跡も見られるが、自然面も残る。遺構の時期とは異なるが、参考資料として図化した。S1は幅2.5cm、厚み0.6cm、S2は幅4.6cm、厚み1.3cm。

溝SD02

土師器坏（46）

高台の一部のみ図化した。低く外反する細身の高台を持つ。

須恵器碗（47）

底部のみ図化した。底部からやや稜をもって開き気味に立ち上がる体部を持つ。体部外内面は回転ナデで、底部内面はナデで仕上げる。底部は回転ヘラ切りである。底径7.5cm。

須恵器坏（48）

やや開きながら短く立ち上がる体部を持つ。外内面は回転ナデで、底部はヘラ切りの後にナデで仕上げる。口径約16.7cm、器高3.0cm、底径約12.3cm。

須恵器短頸壺（49）

口縁部付近のみ図化した。肩部から頸部にかけて強く窄まり、口縁部は短く直口する。口縁端部は外傾へ僅かに拡張して、上端に面をなす。外内面は回転ナデで仕上げ、外面には自然釉も付着する。口径約9.0cm。

須恵器甕（50）

口縁部のみ図化した。大きく開く口縁部で、口縁端部にかけて内彎しながら立ち上がる。端部はやや肥厚して上端に面をなす。外面は回転ナデで、波状文を施す。口径約36.7cm。

瓦（103）

平瓦の小片である。凹部は布目、凸部は縄目タタキが残る。端部はケズリによる面取りを施す。

溝SD03

須恵器碗（51）

やや内彎しながら浅く立ち上がる体部で、口縁端部で僅かに外反して丸くおさめる。外内面は回転ナデで仕上げ、底部は回転糸切りである。口径約14.2cm、器高5.5cm、底径約5.8cm。

溝SD05

須恵器小碗（52）

浅く立ち上がる体部で、口縁端部は丸くおさめる。外内面は回転ナデで仕上げ、底部は回転糸切りである。口径約8.3cm、器高2.9cm、底径2.8cm。

須恵器蓋（53）

中心付近が欠損するが、宝珠ツマミを持つものである。浅い体部で、口縁部は短く折りかえす。口縁部付近から内面は回転ナデで、体部外面は回転ヘラケズリで仕上げる。口径約16.4cm。

溝SD06

須恵器壺（13）

口縁部付近のみ図化した。肩部から頸部にかけて強く窄まり、直口気味に立ち上がる口縁部を持つ。口縁端部は外傾へやや肥厚して丸味を帯びる。肩部外面は6条のカキメを施す。外内面は回転ナデで仕上げる。口径約9.8cm。

須恵器坏（54,55,56,57,58）

54は断面方形の細身の高台を持ち、体部はほぼ直口に立ち上がるものである。外内面は回転ナデで仕上げ、底部は回転ヘラ切りである。口径約14.2cm、器高6.4cm、底径10.7cm。

55,56,57,58は高台を持たないもので、体部は浅く開きながら立ち上がるものである。外内面は回転ナデで仕上げ、底部は回転糸切りである。55は口径約14.2cm、器高3.4cm、底径約10.7cm。56は口径約14.0cm、器高3.8cm、底径約10.7cm。57は口径約13.7cm、器高3.7cm、底径約11.1cm。58は口径約13.4cm、器高3.9cm、底径約10.8cm。

須恵器皿（59）

短く開きながら立ち上がる体部を持つ。外内面は回転ナデで仕上げ、底部は回転ヘラ切り後ナデである。口径約18.4cm、器高2.0cm、底径約16.0cm。

溝SD10

須恵器甕（16）

口縁部付近のみ図化した。やや大型のものである。頸部で大きく窄まり、口縁部は大きく外反しながら短く立ち上がる。体部外面は横方向のタタキ、内面はナデで仕上げ、口縁部はヨコナデである。口径約23.4cm。

土坑SK01

瓦（101）

平瓦の小片である。凹部には布目、凸部には格子タタキが残る。

土坑SK02

土師器小皿（17）

短く開きながら立ち上がる体部を持つ。外内面は回転ナデで、底部は回転糸切りである。口径8.4cm、器高1.5cm、底径約4.6cm。

須恵器小碗（18）

やや内彎しながら立ち上がる体部を持つ。外内面は回転ナデで、底部は回転糸切りである。口径9.4cm、器高3.4cm、底径5.2cm。

須恵器壺（19）

底部のみ図化した。厚手の底部に断面方形の高台を付したものである。外内面は回転ナデで、内面中心付近はユビナデによりやや凹みを持つ。底部はヘラ切り後ナデで仕上げる。底径約11.5cm。

須恵器碗（20）

やや内彎気味に開きながら立ち上がる体部を持つ。口縁部付近でやや内彎し、端部は丸くおさめる。外内面は回転ナデで仕上げ、底部は回転糸切りである。口径約16.5cm、器高5.2cm、底径約5.7cm。

土坑SK03

土師器小皿（21～24）

21～23は短く開きながら立ち上がる体部を持ち、口縁端部は丸くおさめるものである。外内面は回転ナデで、21・23の底部は回転ヘラ切り、22の底部は回転糸切りである。21は口径8.5cm、器高1.9cm、底径6.1cm。22は口径8.5cm、器高1.9cm、底径約5.9cm。23は口径8.5cm、器高1.8cm、底径6.5cm。

24は極短く開き、口縁部で大きく外反するもので、口縁端部ではさらに内へ巻き込み、断面「て」字状を呈する。口縁部付近外内面はヨコナデで、底部はナデで仕上げる。口径約9.2cm、器高1.4cm、底径約4.5cm。

土師器坏（25）

浅く開きながら立ち上がる体部を持つ。外内面は回転ナデで仕上げ、底部は回転糸切りである。口径14.7cm、器高3.9cm、底径7.4cm。

土師器甕（26）

上半部のみ図化した。頸部の窄まりが緩く、短く開く「く」字状口縁部を持つ。胴部外面は縦横方向のハケメで、内面は横方向のイタナデで仕上げ、口縁部はヨコナデである。口径約30.0cm。

須恵器碗（27～29）

27・28はやや内彎しながら立ち上がる体部で、口縁端部は丸くおさめる。外内面は回転ナデで仕上げ、底部は回転糸切りである。27は口径15．0cm、器高5．8cm、底径5．5cm。28は口径約15．5cm、器高5．4cm、底径約5.4cm。

29はやや内彎しながら立ち上がる体部で、口縁部が僅かに外傾する。口縁端部は丸くおさめる。外内面は回転ナデで仕上げ、底部は回転ヘラ切りである。口径約14.7cm、器高5.1cm、底径約5.0cm。

須恵器皿（30）

底部のみ図化した。浅く大きく開く体部を持つものである。外内面は丁寧な回転ナデで仕上げ、底部は回転糸切りである。底径5.9cm。

須恵器小碗（31）

やや内彎しながら立ち上がる体部で、口縁部が僅かに外反する。口縁端部は丸くおさめる。外内面は回転ナデで仕上げ、底部は回転糸切りである。口径8.5cm、器高3.1cm、底径3.6cm。

第4節　室町～戦国時代の遺構と遺物

1．遺構

室町～戦国時代の遺構は、調査区の全域に散在しており、本遺跡における核となる遺構を検出している。検出した遺構は、大型の溝をはじめとして、溝・柱穴列・土坑・方形のテラス状遺構がある。

溝SD03（図版15・16　写真図版20）

遺構はA－24～25地区に位置する。南側を起点として、幅0.2～0.8mの溝がクランクしながら北行する。言わば地形とは逆勾配に流れた水は、北端に設けた2×1m深さ0.8mを測る長方形の水溜めへ流れる構造になっている。

遺物は埋土から備前焼の擂鉢が出土しているが、図化に至らなかった。また、須恵器碗（51）が出土したが、混入遺物と考えられる。

溝SD07（図版15・16　写真図版30）

遺構はA－2地区に位置する。遺構の規模は調査区境であることと、西側を近現代の溝に攪乱を受けていることで不明だが、幅約0.8～2.3m、最大深度約0.5mを測る。

遺物は須恵器小碗片（64）が出土している。

溝SD06（図版15・17～20　写真図版23～25）

遺構はA・B－6～13地区に位置している。検出時の規模は幅約3.8～6.2m、最大深度は1.4mを測る。ほぼ東西方向へ平行に延びる溝部分（B地区断面D－D'～E－E'部分）間の距離は約58mを測り、概ね「逆

コ」字状を呈する。遺構の南西隅は、屈曲部の外端から約15m程南側へ突出し、突出部付近西側ではテラス状遺構（SX01,SX02）等の付帯施設を検出した。

遺構の北東側（A－7地区部分）は、検出時には北側の掘り方を近世水路（SD10）に切られているため判然としないが、東側に短く屈曲して途絶する。また、その北東側にあって、東西に走る溝（B－6地区部分）は、前述の溝より5m北側にずれて途切れており、溝がつながって一体となるのでなはなく、食い違い状になることが窺われる。

溝は、断面の観察から形状が底がほぼ平らあるいは船底状となる逆台形を呈する。土層は、下層において有機物を含む暗灰色シルト質が堆積しており、湛水状態であった事を示し、出土遺物から江戸時代前期頃までは溝が開放していた事が想定できる。また、上層は地山土のブロックを含む土砂で一気に埋め戻されたようである。その土砂中には弥生時代から江戸時代までの遺物が入り混じっており、周辺の遺構や包含層を削って埋め立てた様子が窺える。

遺構は、これらの形状から中世の方形居館に伴う堀の西半部分であることが判明したが、前述した北側の食い違いを見せる溝の状況から、その部分に出入口に相当する施設があった可能性が持たれている。

遺物は土師器の羽釜・鍋（66～72,80,81）、瓦質土器の羽釜（82）、陶器甕類（83～86）、陶器擂鉢（87～89）、陶磁器類（90～96）、瓦質の硯（97）、軒丸瓦（10,105）、平瓦（107～109）、土錘（114）、金属器（M5,M6）が出土した。また、遺構の時期以前の混入土器については前節で記述した。

柱穴列SA01（図版21　写真図版21）

遺構はA－16・17地区に位置する。遺構は軸をやや東に振りつつ南北に走る柱穴列で、現状で方形掘り方を持つ2基（1辺約0.7m）と、円形掘り方のもの大小（直径0.2～0.5m）を合わせて8基の柱穴で構成される。対応する柱穴がなく、掘立柱建物としては認識し難い。遺構の深度は削平により非常に浅く、痕跡を止めるのみであった。

遺物は図化不可能なものも含めて確認できなかった。

土坑SK12（図版21　写真図版21・22）

遺構はA－18地区に位置する。遺構は平坦な地形から急激に崖状の地形に変わる変換点にあり、掘り方南側部分がやや削平を受けているが、概ね直径1mの円形を呈する。遺構は地下深く掘削されており、断ち割りによって可能な限り床面検出を行ったが、検出面から約5.5m掘削したところで検出を断念した。遺構の機能としては、井戸とするのが相当である。

遺物は土師器の羽釜・鍋（74,75）、土師器の甕（76）、須恵器壺（77）、陶器擂鉢（78）、須恵質硯（79）、平瓦（106）が出土した。

2．遺物

溝SD03

須恵器碗（51）が出土したが、前節の遺物に記述している。その他、備前焼の擂鉢が出土したが、図化に至らなかった。

溝SD07

須恵器小碗（64）

底部のみ図化した。大きく開く体部を持つ。外内面は回転ナデで、底部は回転糸切りである。底径約4.8cm。

溝SD06

白磁（60,61）

60は口縁部のみ図化した。口縁端部はやや垂下気味の玉縁を呈する。外内面は回転ナデで、全面に施釉する。口径約16.6cm。

61は底部が欠損する。体部はやや内彎しながら立ち上がり、口縁部は外面に稜を持って外反する。口縁端部は丸くおさめる。外内面は回転ナデで、全面に施釉する。口径約16.5cm。

青磁（62）

口縁部のみ図化した。体部は僅かに内彎しながら開き、口縁端部は細身に丸くおさめる。外内面は回転ナデで、全面に施釉する。外面には縦方向のクシ描き文を施す。口径約15.8cm。

土師器鍋（66）

口縁部のみ図化した。頸部は強く窄まり、やや開き気味に直口する口縁部を持つ。口縁端部は屈曲して外傾に強く拡張して、上端に面をなす。体部外面は横方向のタタキで、内面はナデである。口縁部はヨコナデである。また外面には煤が付着する。口径約18.1cm。

土師器羽釜（69,70,72,80、81）

69,67は同一個体の可能性が高いが、明確な接点がなかったので、分けて図化した。体部は口縁部にかけて内彎しながら立ち上がる。口縁部はやや外傾に拡張して面をなし、鍔部は形骸化して突帯状をなす。体部外面は鍔部以下を斜方向のタタキ、内面はイタナデで、口縁部付近外面はヨコナデである。口径約26.2cm、底径約22.0cm。

72は底部が欠損する。体部は下半部で内傾気味に立ち上がる。口縁端部は外傾へ拡張して上端に面をなす。鍔部は退化し、強いナデにより痕跡を止める。体部外面は鍔部付近以下で斜方向のタタキで、内面はナデである。口縁部はヨコナデである。口径22.0cm、腹径24.4cm。

80は口縁部のみ図化した。内傾気味に立ち上がり、口縁端部は肥厚して丸味を持つ。鍔部は僅かに突帯状に残る。体部内面はイタナデで、口縁部はヨコナデである。また、外面には煤が付着する。口径約19.5cm。

81は上半部のみ図化した。体部は内傾気味に立ち上がり、口縁端部は僅かに肥厚して丸味を持つ。鍔部は突帯状に強く張り出す。体部外面は斜方向のタタキ後ユビオサエ、内面はナデで、口縁部付近はヨコナデである。口径約28.7cm、腹径約33.0cm。

瓦質土器羽釜（82）

口縁部のみ図化した。体部はやや内傾気味に立ち上がるもので、口縁端部は強いヨコナデにより内側へ強く拡張する。鍔部は薄く長手のものがやや下向き加減に付く。鍔部から口縁部付近はヨコナデ、内面はナデである。口径約30.8cm。

備前焼甕（83～86）

83～86は全て口縁部のみ図化した。83,84はともに屈曲後短く外反する口縁部で、口縁端部に粘土粒

を貼付して玉縁状に仕上げる。体部は外内面ともにイタナデで、口縁部は回転ナデである。備前のⅡ～Ⅲ期に相当ものと考えられる。83は口径約42.2cm、84は口径約46.4cm。

85は口縁端部の玉縁がやや幅広の帯状になったものである。外内面は回転ナデである。備前Ⅳ期に相当するものと考えられる。口径約48.0cm。

86は当初須恵器としていたものだが、不明な点が多く一応この範疇に収めた。口縁端部は幅広の帯状をなし、強いナデにより3条の凹線を施す。外内面は回転ナデである。口径約49.7cm。

陶器擂鉢（67,68,87～89）

67は底部のみ図化した。やや外反気味に立ち上がる体部を持つ。外内面は回転ナデで、内面には6本1単位の擂目を施すが、使用により明瞭でない。底径約13.9cm。

68は底部のみ図化した。大振りの底部からやや内彎気味に立ち上がる。外面は回転ナデ後ユビオサエが顕著に残る。内面は回転ナデ後8本1単位の擂目を施すが、使用によりやや明瞭さに欠ける。底径約18.2cm。

87は口縁部のみ図化した。体部は外反気味に立ち上がり、口縁部は直口して外端に面をなす。外内面は回転ナデで、擂目は確認できなかった。片口鉢とも考えられる。口径約29.5cm。

88は底部のみ図化した。大きく開く体部を持つ。外内面は回転ナデで、内面は10本1単位程の擂目を施す。底部付近外面には回転ヘラケズリが残る。底径約18.0cm。

89は下半部のみ図化した。体部は僅かに外反気味に立ち上がる。外内面は回転ナデで、外面は所々にユビオサエが残る。内面は10本1単位程度の擂目を施す。底部は回転ヘラ切りである。底径約13.0cm。

陶磁器類（90～96）

90は底部が欠損する。染付け磁器の小型の盃である。やや内彎気味に立ち上がり、口縁部で僅かに外反する。口径約6.1cm。

91は底部のみ図化した。染付け磁器の碗であろう。やや内頬気味の細身の高台が付く。外内面は全体に施釉する。底径約4.0cm。

92は底部のみ図化した。施釉陶器の碗であろう。丸身の低い高台が付く。外内面は全体に施釉する。底径約4.8cm。

93は瀬戸美濃系の小皿である。浅く開き気味に立ち上がる体部から、屈曲して「へ」字状の口縁部を持つ。口縁端部はやや上方に拡張する。外内面は全体に施釉し、高台部付近のみ釉の剥離が見られる。口径約10.9cm、器高2.0cm、底径約5.3cm。

94は底部のみ図化した。染付け磁器の皿である。僅かに立ち上がる浅い体部で、丸味を持った低い高台が付く。外内面は全体に施釉するが、高台の畳付き部は釉を掻き取る。また、畳付き部と高台裏の中央部には砂目が残る。底径約4.7cm。

95は底部が欠損する。染付け磁器の碗である。体部はやや内彎しながらほぼ直口する。外内面は全体に施釉される。口径約9.5cm。

96は急須の把手である。先膨れの形状で、先端に円孔を施す。外面は全面に施釉される。瀬戸と考える。把手部幅3.5cm。

瓦質硯（97）

風字硯である。全体の1／4程の残存である。裏面にはやや高まりがあり、高台状のものが付くと考えられる。高さ2.5cm。

軒丸瓦（104,105）

104は瓦当部が全体の半分程残存する。単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。瓦当側端部はケズリで、裏側はナデで仕上げる。瓦当側端部の厚さ2.7cm。

105は瓦当部中央が辛うじて残存する。三巴文軒丸瓦である。瓦当裏側はユビナデである。

軒平瓦（111）

瓦当の一部分のみ図化した。唐草文軒平瓦である。瓦の凹部は布目、凸部は丁寧なナデで仕上げる。図化した軒平瓦は１点のみだが、近接する中西廃寺出土の軒平瓦と同范のものとみられる。瓦当面の厚さ5.5cm。

平瓦（107～110）

107は凹部に布目、凸部に縄目状タタキが残る。端部はケズリで面取りをする。厚さ1.8cm。

108は凹部に布目、凸部に縄状タタキが残る。端部はケズリで面取りをする。厚さ1.5cm。

109は凹部に布目、凸部に格子状タタキが残る。厚さ2.2cm。

119は凹部に布目、凸部に格子状タタキが残る。端部はケズリで面取りをする。厚さ2.3cm。

土師質土錘（114）

管状の土錘である。全体をナデで仕上げる。長さ4.5cm、幅1.3cm。

鉄製品（M3,M４）

Ｍ３は釘である。初見で角釘と認識したが、丸釘であった。近現代の混入物と理解した。長さ9.4cm、厚さ0.8cm。

Ｍ４は鎌等の柄の部分と考えられる。２箇所に目釘穴を有す。長さ8.6cm、幅1.9cm、厚さ0.8cm。

銅製品（Ｍ５）

煙管の火口の部分である。先端の突起部は欠損している。長さ6.1cm、幅1.2cm。

溝SD06内テラス状遺構SX01

鉄器（Ｍ６）

釘若しくは楔と考えられる。長さ4.8cm、幅1.4cm、厚さ1.2cm。

土坑SK12

土師器羽釜（74,75）

74は下半部が欠損する。体部はやや内彎気味に立ち上がる。口縁端部は丸味を持ち、やや内側に拡張する。鍔部は突帯状に若干突出する。口径約21.0cm。

75は下半部が欠損する。体部はやや内傾気味に立ち上がる。口縁端部は丸味を持ち、外側に拡張して突帯状をなす。鍔部は突帯状に若干突出する。口径約22.4cm。

弥生土器甕（76）

口縁部のみ図化した。稜の緩い「く」字状口縁で、やや外反気味に立ち上がる。胴部外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のケズリで、口縁部はヨコナデである。口径約16.4cm。

須恵器壺（77）

口縁部のみ図化した。強く窄まる頸部からラッパ状に開き、口縁端部付近で外反する。口縁端部は上方に大きく拡張して外端に面をなす。外内面は回転ナデで、全体に自然釉が付着する。口径約9.3cm。

陶器擂鉢（78）

口縁部付近のみ図化した。大きく開く体部から屈曲して内傾気味に立ち上がる口縁部を持つ。口縁端部は、調整によりやや面を持つ。外内面は回転ナデで、内面には擂目が残る。口径約30.4cm。

硯（79）

風字硯の破片である。全体の形態は不明だが、高台が付くものである。海部は非常に強い擦り面がある。海部の厚さ約1.0cm。

平瓦（79）

凹部は布目、凸部は斜方向の線状タタキが残る。端部はケズリで面取りする。厚さ2.1cm。

溝SD08

土師器羽釜（71）

上半部のみ図化した。体部はやや内傾気味に立ち上がり、口縁部で僅かに内傾する。口縁端部は内傾へやや拡張し、鍔部は突帯状に低く張り出す。体部外面は斜方向のタタキ、内面はイタナデで、口縁部付近はヨコナデである。口径約25.3cm。

第4節　近世以降の遺構と遺物

1．遺構

近世以降（江戸時代以降）の遺構は、調査区北半部の平坦地、特に1・2区と7区、13・14区において顕著である。検出した遺構は溝（水路）、土坑である。水路については江戸期に掘削されたものが、現代まで踏襲して使われたものであり、現代の水田畦畔の区割りと対応する部分も見られる。

溝SD10（図版22　写真図版26）

遺構はA・B－6・7地区に位置する。東西に延びる溝で、全時期の溝SD06北側の溝の食い違いに沿って走っている。また、溝の一部はA－7地区において屈曲して南下するようである。

遺物は須恵器碗（65）、陶器擂鉢（73）、石製品（S7,S8,S9）、鉄製品（M2）、銅製品（M7）が出土しているが、古い時期のものも混入する。遺物については便宜上当該時期にまとめた。

土坑SK09（図版23　写真図版28・29）

遺構はA－13地区に位置する。土坑SK10を切る。遺構の形状及び規模は、2.1m×1.8mの長方形状で、断面はやや船底状の台形を呈する。最大深度は0.3mを測る。遺構の床面には被熱部分があり、炭や小・中サイズの角礫が部分的に集積しており、明らかに遺構内において火を焚いているが、用途は不明である。

遺物中で図化できたのは土師製土錘（113）がある。

土坑SK07,08,10,13（図版23・24　写真図版27・29）

遺構はA－13・14・17地区に位置する。大型の方形あるいは不定形土坑である。遺構の用途については明確ではないが、粘土取りの穴と考えられる。また、遺構はA－13地区に位置するSD10は、土坑SK09に切られる。

近現代水路（写真図版30）

水路はA－1地区に位置し、その延長はB地区にまで延びる。調査区では大きく「く」字に屈曲しており、最大幅2.5mを測る。室町～戦国時代の溝SD07を切る。

遺物は青磁碗（63）、陶器壺（98）、陶器擂鉢（99,100）、石製品(S4,S5,S7）が出土した。

2．遺物

溝SD10

須恵器碗（65）

底部のみ図化した。やや内彎気味に開く体部である。外内面は回転ナデで仕上げ、底部は回転糸切りである。底径約7.2cm。

陶器擂鉢（73）

底部のみ図化した。開き気味に立ち上がる。外内面は回転ナデで、底部付近外面はヘラケズリで仕上げる。内面には5本1単位の擂目を施す。底径約13.9cm。

石製品（S7,S8,S9）

S7は凰字硯である。1/4程の残存だが、長方形状を呈するものと考えられる。海部は非常に良く使用され、擦痕も明確に残る。部分的に強い凹みがあり、砥石等に二次使用されたことも考えられる。陸部の高さ2.5cm。

S8は宝篋印塔の笠部である。笠部の四隅に付く隅飾や相輪部は欠損している。現存高14.9cm、現存幅20.9cm。

S9は石臼である。全体の1/2が残存する。上部の供給口は痕跡のみである。芯棒受けは丸味のある台形状を呈する。挽き木の取り付けは、横打ち式である。臼の目は7分割と推測され、1分割中7溝である。直径29.5cm、厚さ11.1cm。

鉄製品（M2）

扁平な板状を呈すが、用途不明である。長さ5.1cm、幅2.6cm、厚さ0.7cm。

銅製品（M7）

煙管の吸口である。火口につながる木製管の一部が残る。現存長11.7cm、直径1.2cm。

土坑SK09

土師質土鍾（113）

環状の土鍾である。中央部付近にやや膨らみを持つ。長さ3.3cm、幅1.2cm。

近現代水路

青磁碗（63）

口縁部のみ図化した。やや開き気味に立ち上がる体部で、口縁部は僅かに外反する。口縁端部は丸くおさめる。外内面は全体に施釉される。口径約15.6cm。

陶器壺（98）

球形の体部に細い頸部を持つものである。口縁端部はやや外側に拡張して玉縁状をなす。底部には断面台形状の高台を付す。外内面は回転ナデで、外面には底部から口縁部付近まで施釉されるが、高台の

畳付き部分は露胎する。口径3.9cm、器高30.3cm、腹径約18.1cm、底径約9.2cm。

陶器鉢（99）

大きく開く体部で、口縁端部は粘土帯を貼付してやや垂下する。外内面は回転ナデで、底部内面はナデである。擂目を持たない大型の捏ね鉢である。口径約41.4cm、器高16.7cm、底径約19.1cm。

陶器擂鉢（100）

開気味に立ち上がる体部で、口縁端部は内側に拡張して上端に面をなす。また、一部が大きく外反して片口をなす。外内面は回転ナデで外面から口縁部付近外内面まで施釉する。底部は回転糸切り後ナデである。また、内面には10本1単位の擂目を持つ。口径約27.4cm、器高11.3cm、底径約14.1cm。

石製品（S4,S5）

S4,S5は砥石である。前者は不定形、後者は長方形状を呈する。両者共に、部分的剥離及び打割を受けているものの、非常に良く使用され、擦痕も明瞭である。S4は長さ10.2cm、幅5.4cm、厚さ2.6cm。

S5は長さ14.3cm、幅6.0cm、厚さ3.3cm。

その他包含層

土師質土錘（115）

管状のものである。体部中央がやや膨らみを持つ。長さ4.5cm、幅1.2cm。

石製品（S3,S6）

S3は石斧である。欠損して全形を止めないが、刃部付近が残存する。扁平で、刃部に加工が両側に施され、擦痕が明瞭に残る。また片側には鋭利なもので擦った痕跡があり、砥石として二次使用されたものと考えられる。残存長5.2cm、幅5.0cm、厚さ1.0cm。

S6は砥石である。一部欠損するが長方形状のものである。中央部付近が僅かに凹み使用の頻度を窺わせるが、時期的には近現代のものと考える。残存長11.7cm、幅5.6cm、厚さ2.0cm。

金属器（M1）

扁平な板状をなすが、平面形が不定で用途も不明である。長さ5.3cm、幅3.5cm、厚さ0.7cm。

第4章　おわりに

第1節　北谷遺跡について

北谷遺跡は、調査の結果、弥生時代～鎌倉時代の遺構を検出した。しかし、水田開発による削平が著しいため、各時代を遺構面ごとに把握することはできず、また、遺物量も少なかった。

検出した主要な遺構については以下のことが言える。

弥生時代の溝については、遺跡の南側に隣接する中西台地遺跡・中西低地遺跡との関係が考えられるが、両者間には幾つかの谷が入り込んでいるようで、立地及び時期的な部分を考えると、同一集落を構成するものではなかろう。

掘立柱建物・木棺墓は、時期の決め手に欠けるものの、恐らく奈良時代～鎌倉時代の何れかに属すると考えられる。もしそうであれば、台地の南端部に立地する中西廃寺と同時期に存在していたものと言える。

鋤溝については、加古川流域で認められる条理との関係を考える必要があるが、遺跡周辺における水田開発は近世に入ってからということで、近世以降の遺構と言えよう。

第2節　中西台地遺跡について

中西台地遺跡は、調査の結果、弥生時代・奈良～平安時代・室町～戦国時代にかけて断続的に営まれた集落遺跡であることが分かった。しかし、北谷遺跡と同様に近世以降の水田等の開発により削平が著しいため、遺構の残存状況が悪く、残念ながら全体的に遺構の内容が判然としない現状にある、そのような状況にあっても、戦国時代の堀状の溝と奈良～平安時代の溝のような深い遺構の検出によって、遺跡の性格を垣間見ることができる。

・戦国時代の方形居館について

本調査における主な成果の一つは、戦国時代の方形居館に伴う堀の発見である。堀から出土する遺物は、堀として機能していたとみられる存続時期の関係で17世紀代まで下るものも多いが、江戸時代になってからこのような施設を新たに作ることは考え難く、やはり遺跡の東方約300mに立地する神吉城との関連で戦国時代に築かれた蓋然性が高いもと考えられる。また、その他の出土遺物として備前焼の甕・擂鉢等があり、これらの遺物が堀あるいは居館の築造時期に相当するものと考えられる。

堀に囲まれた内郭部分の遺構は、17世紀頃の新田開発に伴う造成によって一気に削平されてしまっているため不明であるが、居館の構造として注目すべき点は、方形を呈する堀(SD06）の北西隅部分が、食い違い状になっていることである。恐らく居館の出入口とみられるこの部分は、約6m程の食い違いをみせ、高低差も現状で数10cmの段差がある。近世水路もこれに影響され、ここで流れをクランクさせている。このことから、この部分には段差を利用したスロープ状の出入口を設けていたものと考えられる。

・中西廃寺関連遺物について

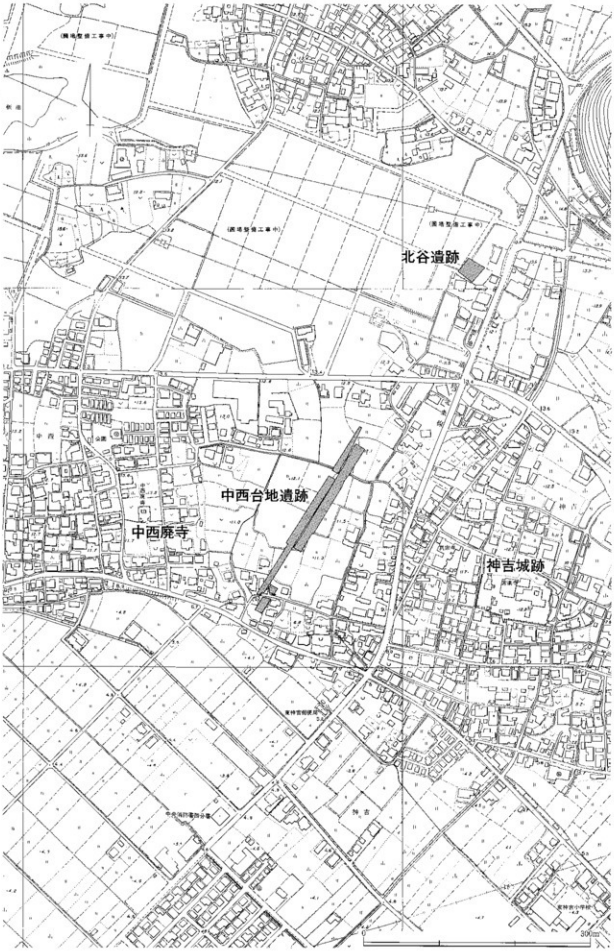
遺跡の西方約200mに立地する中西廃寺は、白鳳期から平安時代若しくは中世まで造営した寺である。

本遺跡からは、中西廃寺に伴う施設は発見されていないが、奈良～平安時代の溝SD01及び戦国時代の堀SD06の埋土から中西廃寺に関連する遺物が出土している。須恵器製の円面硯（45）は、加古川市志方町札馬古窯跡群産とみられる精良品で、８世紀代の遺物である。軒平瓦（111）は、以前に中西廃寺で採集され、加古川市史第１巻で紹介されている軒平瓦Bと同笵の可能性が高い。今回出土した瓦は、中心飾りの部分が残存しているため、文様の全体を復元することができよう。

・弥生時代の遺構について

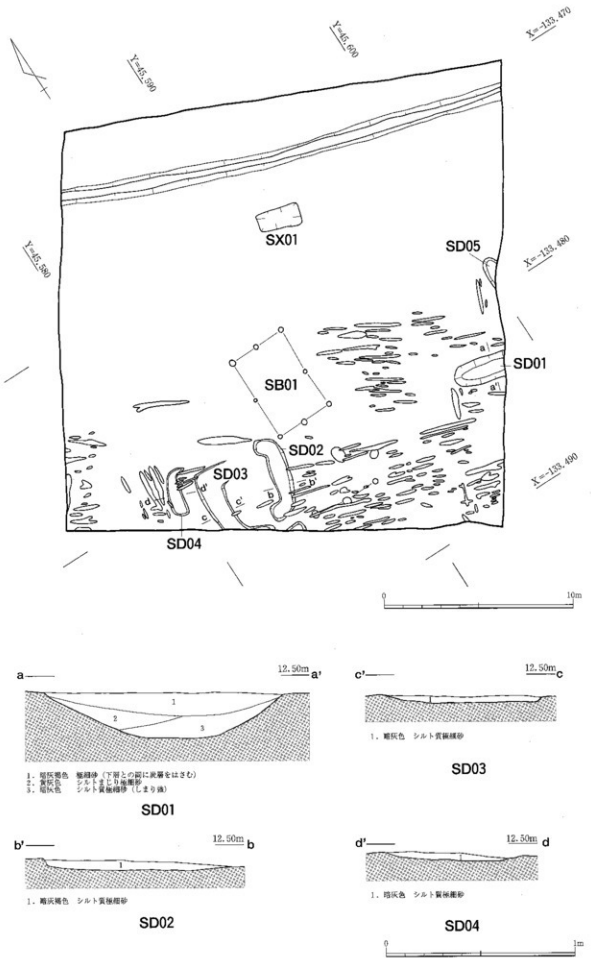
今回の調査において、弥生時代と考えられる遺構はB地区の南側で検出した４基の柱穴列のみであった。遺構の西半部分は大きく攪乱を受けており、他の柱穴等の確認ができなかったため、建物としての復元は不可能であった。ただし、各柱穴の規模が径約70cmを測る大型のものである事から、検出した４基の柱穴を含めた大型建物の存在も想像させる、非常に興味深い遺構である。また、出土遺物では、後世の遺構から多量の弥生土器（概ね畿内第Ⅳ様式の範疇）が含まれていることから、本遺跡を含めた台地上に、弥生時代の集落が広がっていた事が想定される。

図　　版

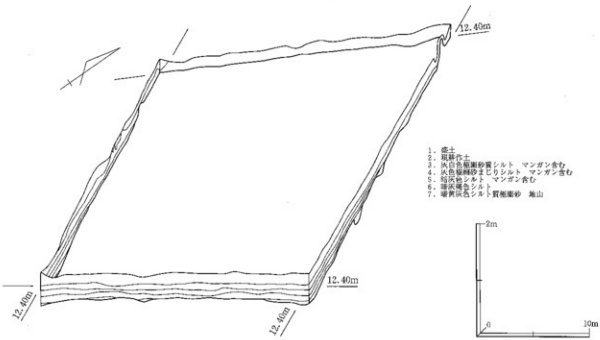


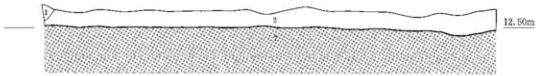
遺跡の位置

図版 2

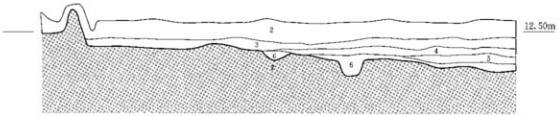


北谷遺跡　全体図・溝断面図

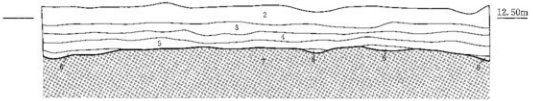




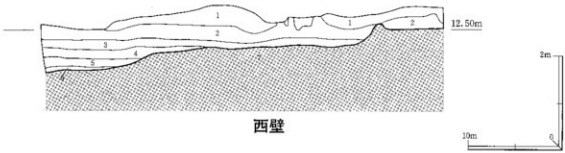
北壁



東壁



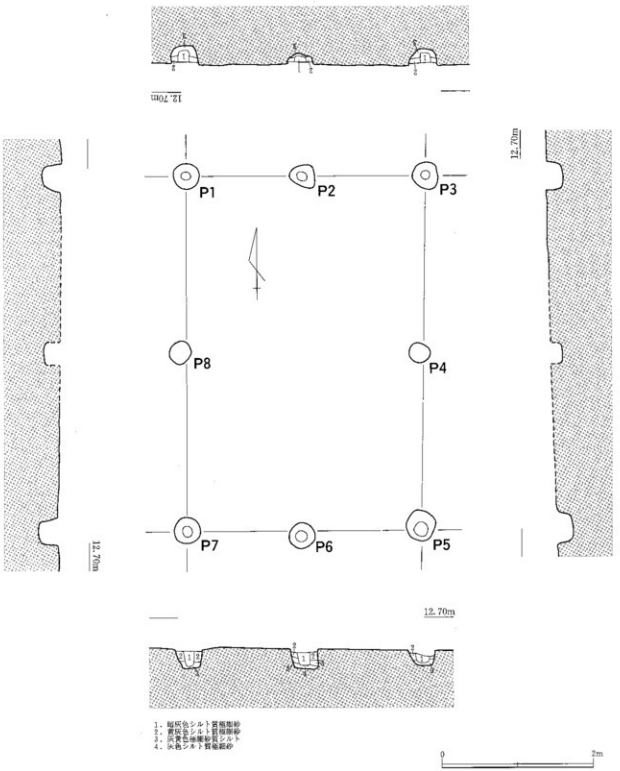
南壁



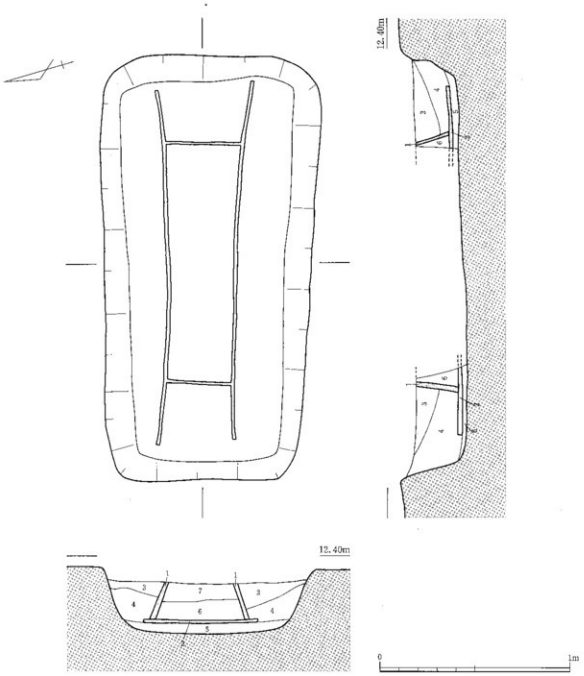
西壁

北谷遺跡　土層断面図

図版 4



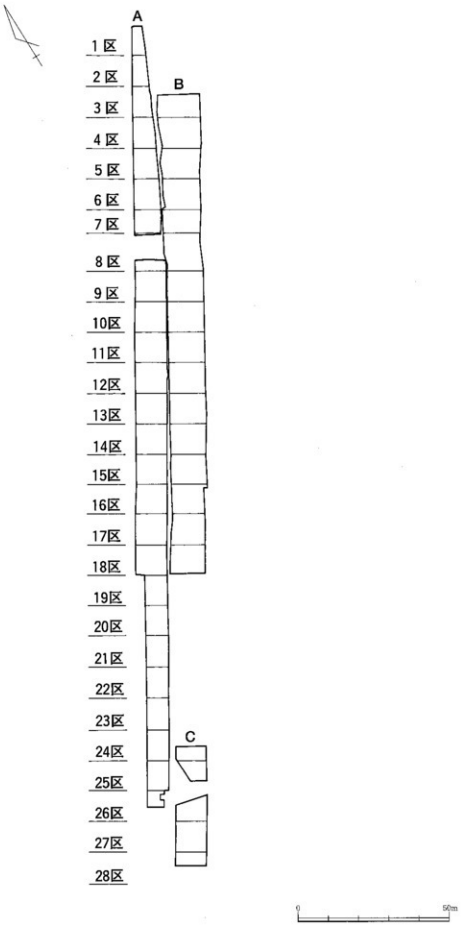
北谷遺跡　ＳＢ01



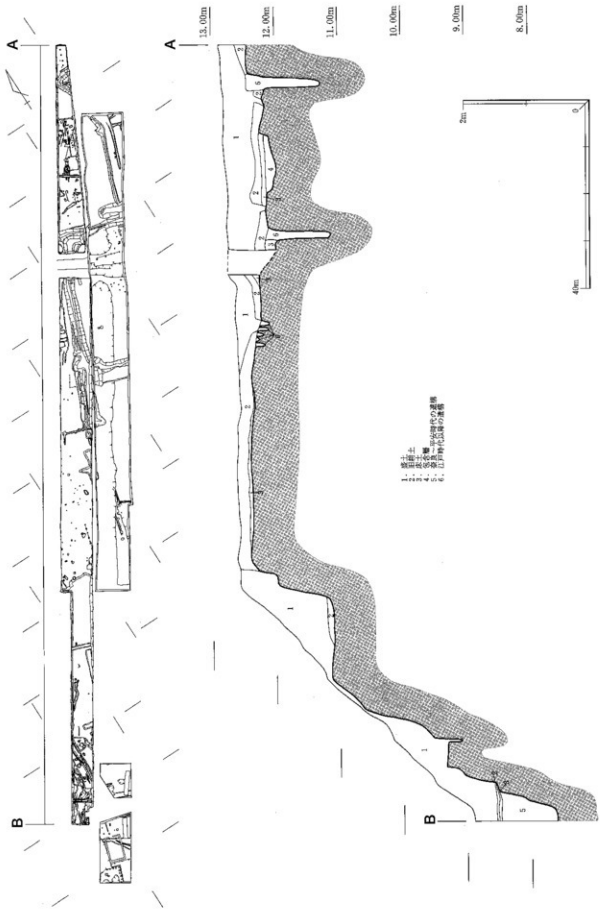
1．灰白色　極細砂（稲のあと）
2．暗灰色　シルト（杉材の痕跡あり）粘性
3．黄灰色　シルトまじり極細砂　しまり強い
4．灰黄色　シルト黄極細砂　しまり強い
5．灰黄色　極細砂まじりシルト（柏のしみこみの可能性もある）粘性
6．灰黄色　極細砂　しまり強い
7．黄灰色　極細砂　しまり強い

北谷遺跡　ＳＸ01

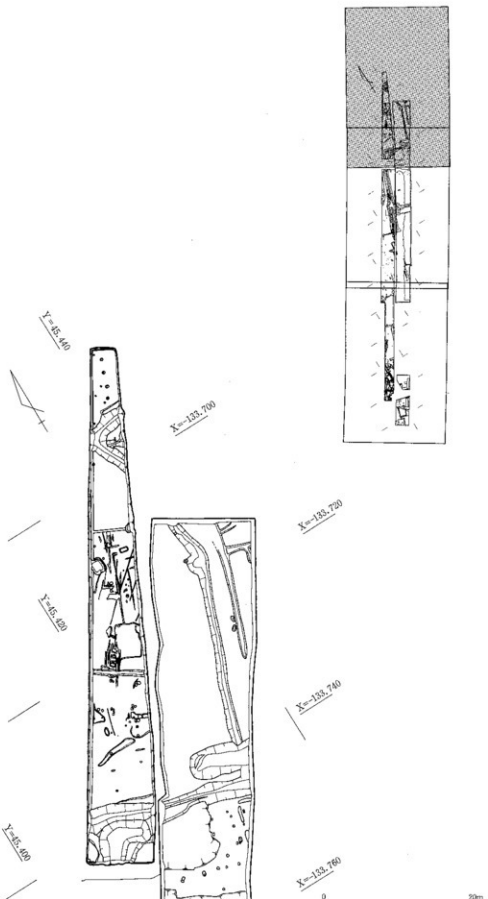
図版 6



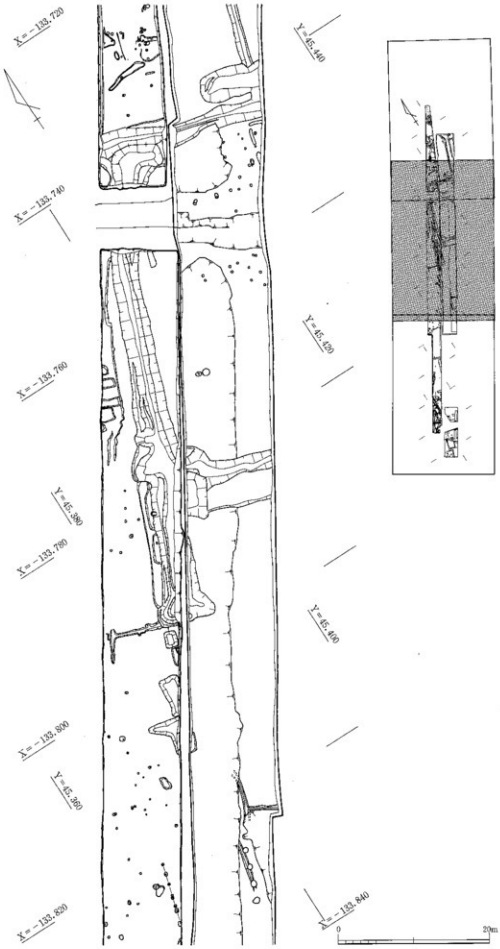
中西台地遺跡　調査区割図



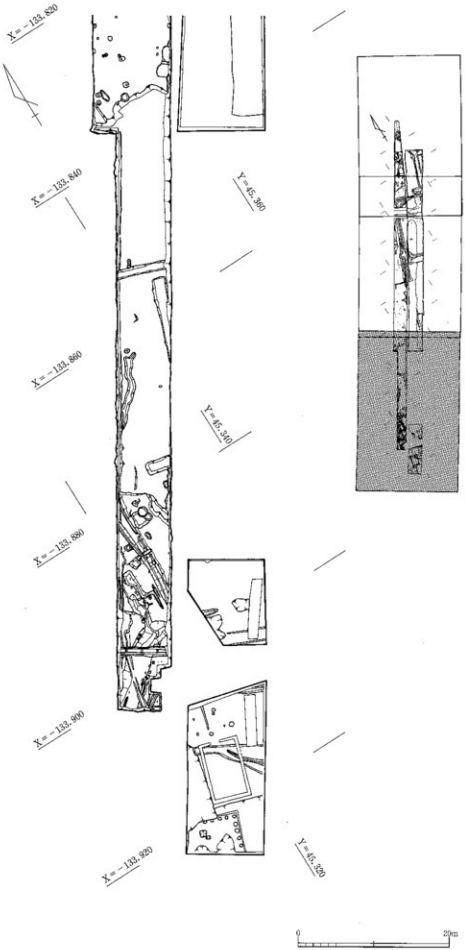
中西台地遺跡　調査区断面図



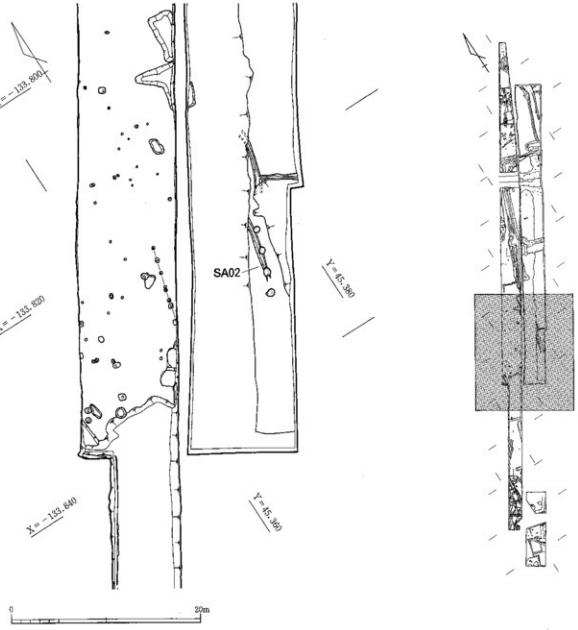
中西台地遺跡　遺構配置図①



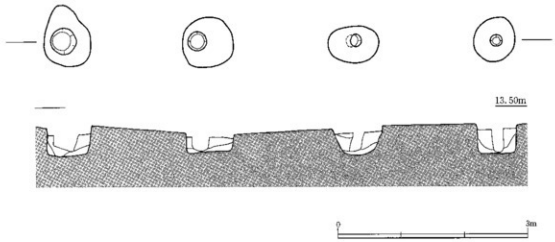
中西台地遺跡　遺構配置図②



中西台地遺跡　遺構配置図③

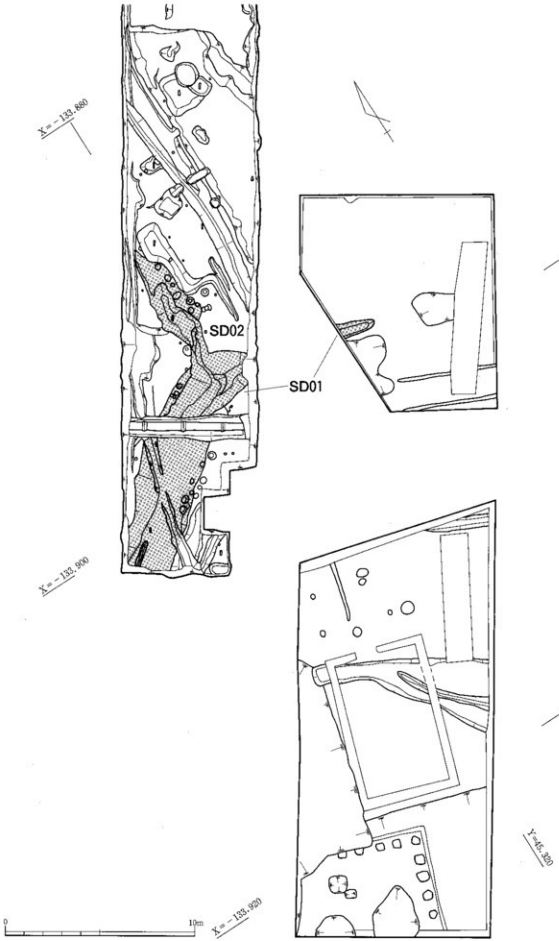


SA02

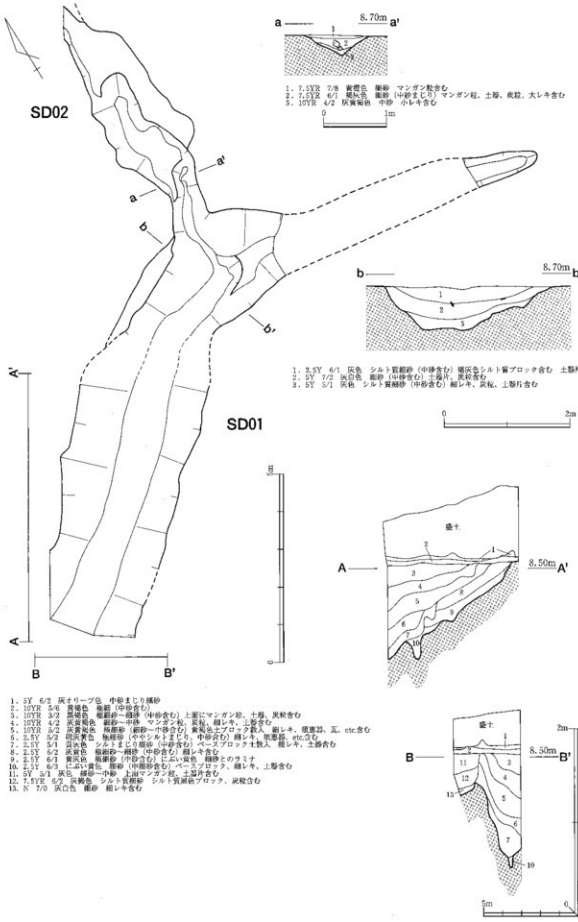


中西台地遺跡　弥生時代の遺構

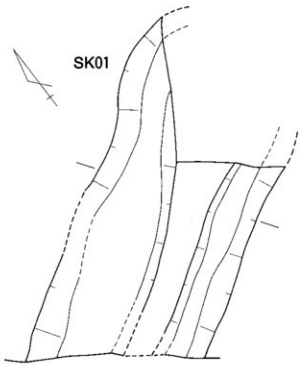
図版12



中西台地遺跡　奈良～平安時代の遺構①

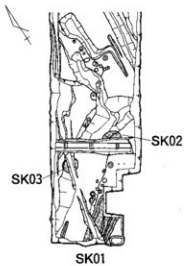


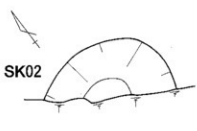
中西台地遺跡　奈良～平安時代の遺構②



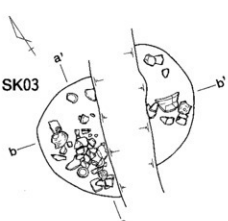
1. 7.5YR 5/2 灰褐色 シルト質細砂 シルト質黒色ブロック、シルト質黄色ブロック、炭粒含む
2. N 5/0 灰白色 細砂 小レキ含む
3. 7.5YR 6/2 灰褐色 シルト質細砂 シルト質黒色ブロック、炭粒含む
4. N 7/0 灰白色 細砂 種レキ含む

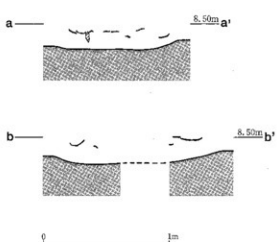
0 2m



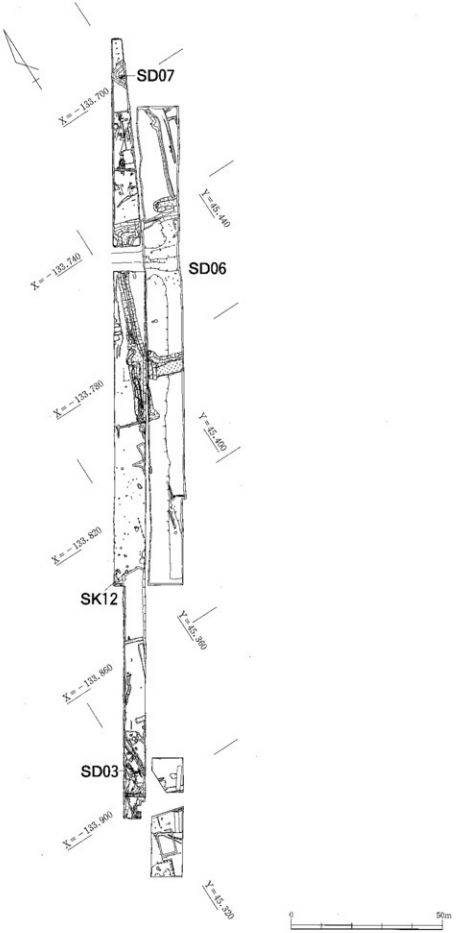


1. 2.5Y 5/2 暗灰黄色 種砂（中粒含む）十器、マンガン粒含む
2. 10YR 5/2 灰黄褐色 種砂（中粒砂含む）種レキ、土器、炭粒含む
3. 2.5Y 6/2 灰黄色 種砂～中砂 小レキ、黒色ブロック、炭粒含む
4. 2.5Y 5/2 暗灰黄色 細砂～中砂 種レキ、炭粒含む

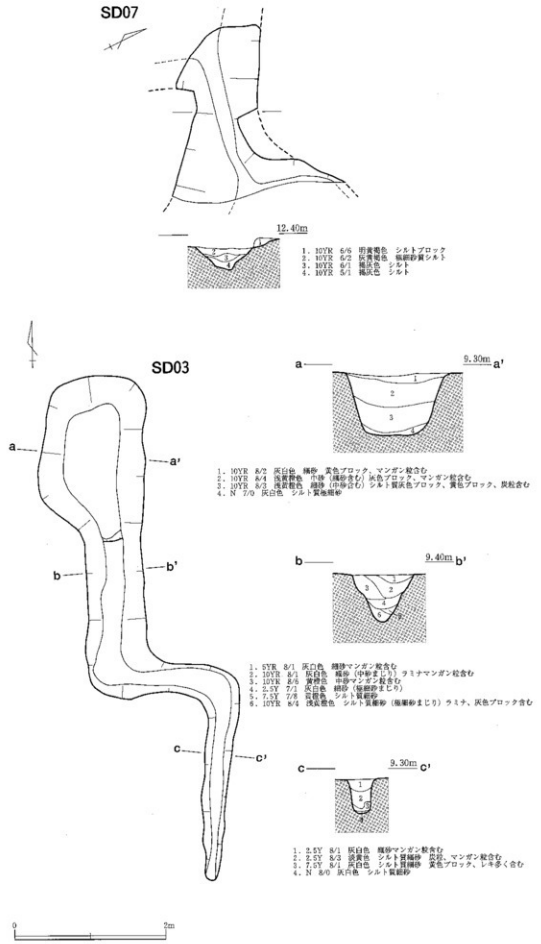




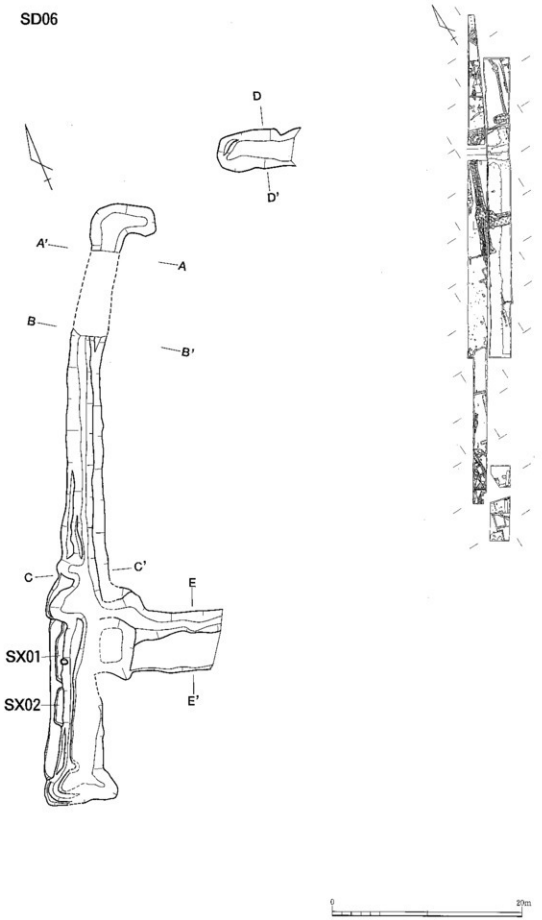
中西台地遺跡　奈良～平安時代の遺構③



中西台地遺跡　室町～戦国時代の遺構①

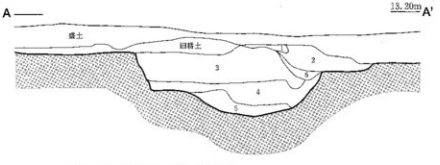


中西台地遺跡　室町～戦国時代の遺構②

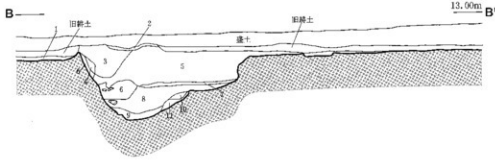


中西台地遺跡　室町～戦国時代の遺構③

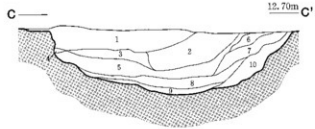
図版18



1. 10YR 5/6 黄褐色 中砂 灰色粘土ブロック含む（盛土か？）
2. 2.5Y 6/1 黄灰色 緑砂～中砂 小レキ、マンガン粒含む（落葉土）
3. 2.5Y 5/1 黄灰色 緑砂（中砂含む）黄灰色ベースブロック多量に混入、マンガン粒、土器含む（溝内部盛土）
4. 7.5Y 6/1 灰色 シルトまじり細砂（中砂含む）小レキ、炭、 部ベースブロック混入
5. 2.5Y 5/1 青灰色 シルト質極細砂 細レキ、小レキ含む、一部灰白色中砂のラミナ状堆積あり
6. 2.5Y 5/2 暗灰黄色 シルト質極細砂（黄色粘土ブロック、下面に白色砂含む）

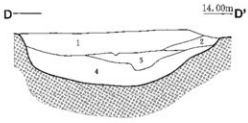


1. 2.5Y 5/2 暗灰黄色 無機砂 Fe₂O₃含む（床土）
2. 2.5Y 7/4 浅黄色 極細砂黄シルトブロックパッチ状
3. 2.5Y 7/1 灰白色 シルト質無機砂 シルトブロック、土器含む
4. 10YR 7/1 灰白色 極細砂
5. 2.5Y 6/1 黄灰色 シルト質極細砂 黄色シルトブロックパッチ状
6. 2.5Y 7/4 浅黄色 極細砂～緑砂（黒砂含む）豆レキ含む
7. 5Y 6/2 灰オリーブ色 シルト質極細砂（極粗砂含む）
8. 2.5Y 6/2 灰黄色 シルト質極細砂～グラニュール ラミナ、ドレキ含む
9. 5Y 5/1 灰色 シルト質細砂
10. 5Y 6/2 灰オリーブ色 シルト質極細砂
11. 5Y 7/1 灰白色 極細砂

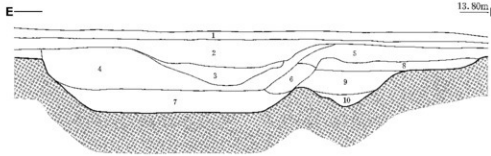


1. 明黄褐色 シルトまじり細砂（中砂含む）灰色シルトブロック、マンガン、土器含む
2. 明黄褐色 シルトまじり細砂（中砂含む）暗灰色シルトブロック含む、下層に灰色シルト質細砂堆積
3. 灰色 細砂～中砂 一部ベースブロック混入
4. 灰色 シルト質細砂 マンガン粒混入
5. 灰白色 シルト質細砂（中砂含む）炭、土器含む、一部ベースブロック混入
6. 黄褐色 シルトまじり細砂（中砂含む）細レキ、炭含む
7. 浅黄色 シルトまじり細砂 一部灰色細砂堆積、土器、炭含む
8. 灰色 シルト質極細砂 炭含む
9. 灰色 シルト（中砂含む）炭含む
10. にぶい黄色 シルト質細砂（中砂含む）灰色シルトとのラミナ状堆積、上面にベースブロック下層に明灰色シルト堆積

中西台地遺跡　室町～戦国時代の遺構④



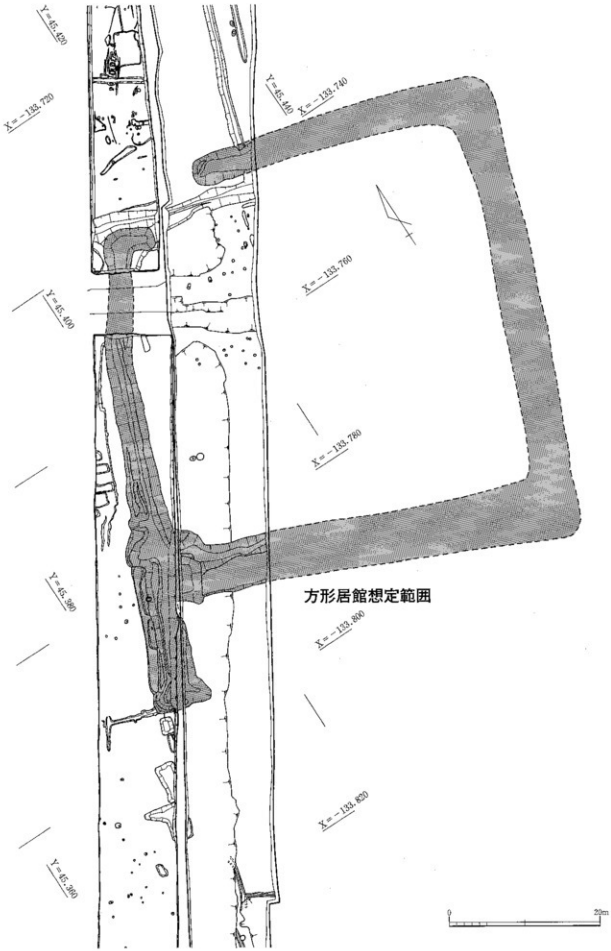
1．淡黄褐色　シルト質極細砂　灰褐色粘質極細砂ブロック混り　人為的埋もどし
2．灰褐色　粘質極細砂～細砂　人為的埋もどし
3．灰色　シルト質極細砂～細砂　黄褐色シルトブロックまじり　人為的埋もどし
4．灰色　シルト質極細砂　黄褐色シルトブロックまじり



1．盛土
2．黄褐色と灰黄色　極細砂～礫砂　粘質土のカクハンされたもの（人為的埋土）
3．灰色　シルト極細砂と黄褐色　極細砂～礫砂
4．灰褐色　粘質細砂～中砂　人為的埋めもどし
5．黄褐色と灰黄色　極細砂～礫砂のカクハンされたもの　人為的埋めもどし
6．灰褐色と黄褐色　極細砂～中砂のカクハンされたもの　人為的埋めもどし
7．灰色　細礫混シルト
8．灰黄色と灰色　シルト　極細砂のカクハンされたもの　人為的埋めもどし
9．灰色　細礫混シルト
10．灰黄色　極細砂～細砂

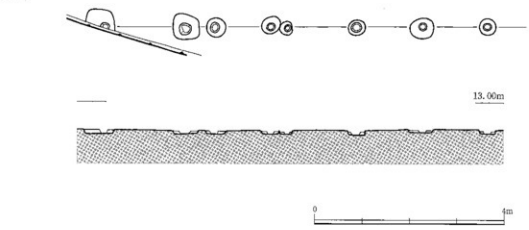
中西台地遺跡　室町～戦国時代の遺構⑤

図版20

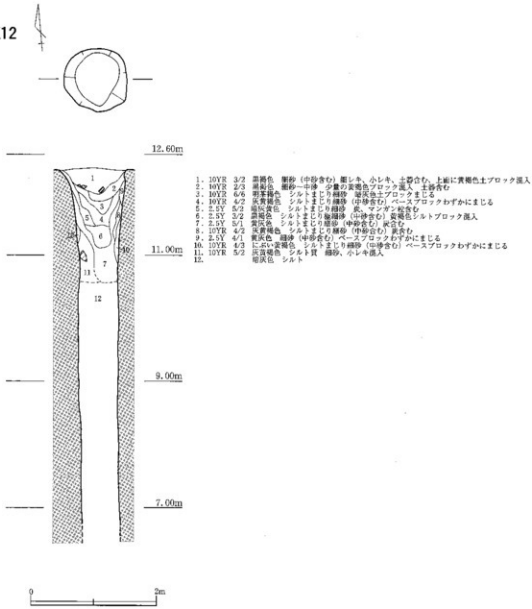


中西台地遺跡　室町～戦国時代の遺構⑥

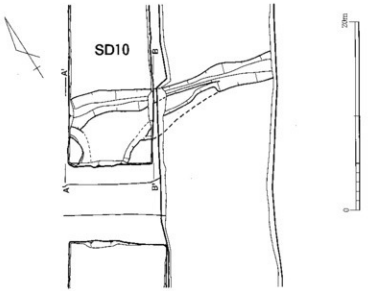
SA01

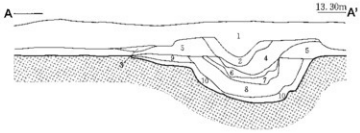


SK12

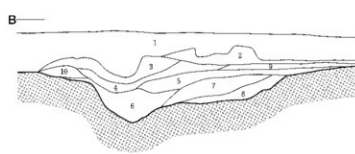


中西台地遺跡　室町～戦国時代の遺構⑦





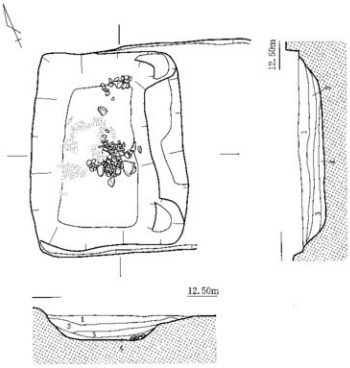
1. 表土および耕土
2. 5Y 5/1 灰色 細砂～中砂 縞レキ含む
3. 5Y 5/1 灰色 細砂 (中砂含む)
4. 7.5Y 5/1 灰色 細砂～中砂 縞レキ、一部ベースブロック混入
5. 2.5Y 6/2 灰黄色 縞砂 (中砂含む) 小レキ、マンガン粒、一部ベースブロック混入
6. 2.5Y 6/1 黄灰色 粘縞砂～縞砂 黄灰色シルトブロック、マンガン粒、炭、土器含む
7. 7.5Y 7/1 灰白色 縞砂 (中砂含む) 炭、マンガン粒含む
8. 5Y 6/1 灰色 シルトまじり縞砂 (中砂が主) 縞レキ、小レキ、マンガン粒、一部ベースブロック混入
9. 5Y 6/1 灰色 細砂～中砂 土器にマンガン粒、縞レキ、ベースブロック混入
10. 7.5Y 7/1 灰白色 縞砂～中砂 マンガン粒、土器、縞レキ、小レキ、辺もあがり付近にベースブロック混入

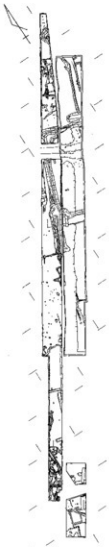


1. 表土および耕土
2. 2.5Y 7/1 灰白色 細砂～中砂 ベースブロック混入
3. 2.5Y 5/1 黄灰色 細砂 (中砂含む) 縞砂
4. 2.5Y 6/1 黄灰色 細砂～中砂 一部灰白色ないぶとのラミナ状堆積あり、マンガン粒含む
5. 5Y 7/1 灰白色 縞砂～中砂 マンガン粒、炭、ベースブロック混入
6. 5Y 6/1 灰色 シルトまじり細砂 (中砂含む) 縞レキ～小レキ、土器含む 下層部分は灰白色中砂とのラミナ状堆積
7. 2.5Y 7/1 灰白色 中砂 マンガン粒、ベースブロック混入
8. 2.5Y 7/2 灰黄色 中砂 縞レキ、炭含む
9. 2.5Y 7/1 灰白色 細砂～中砂 小レキ、マンガン粒、炭、土器含む
10. 2.5Y 7/1 灰黄色 細砂～中砂 マンガン粒、炭、土器含む

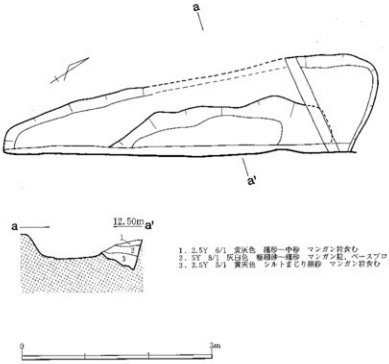
中西台地遺跡　近世以降の遺構①

SK09



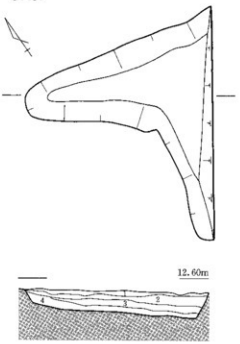


SK10



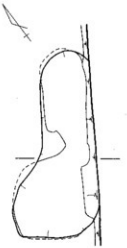
中西台地遺跡　近世以降の遺構②

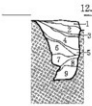
SK07



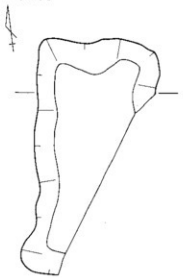
1. 2.5Y 5/1 黄灰色 細砂（中砂含む）ベースブロック、マンガン粒含む
2. 10YR 5/1 褐灰色 細砂（中砂～粗砂含む）ベースブロック、マンガン粒含む
3. 2.5Y 6/2 灰黄色 極細砂～細砂 ベースかブロック、マンガン粒、炭、土器含む
4. 5Y 6/1 灰色 極細砂（中砂含む）ベースかブロックおよび暗色土かブロック、土器含む

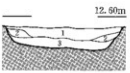
SK13





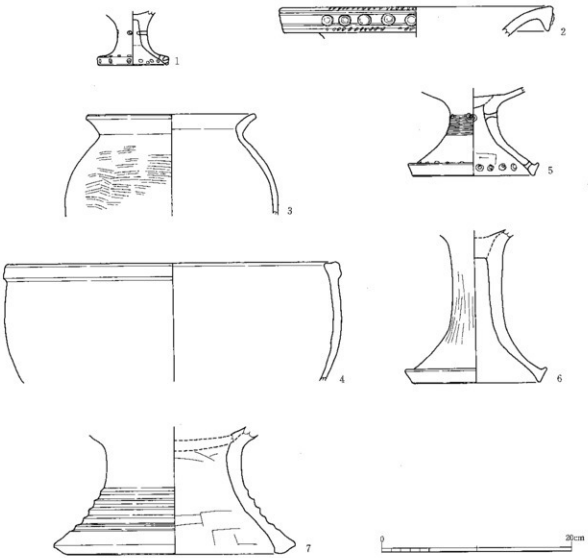
SK08



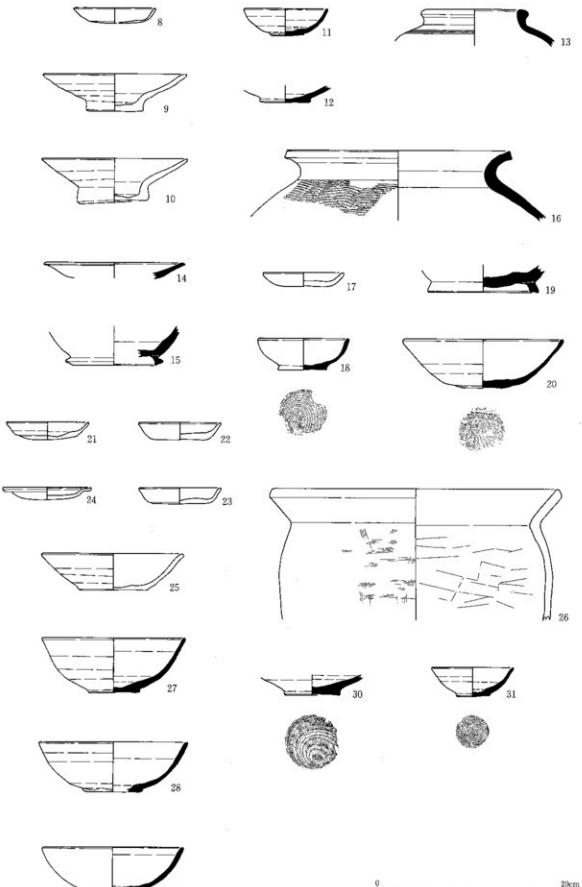


1. 2.5Y 6/1 黄灰色 細砂～中砂 マンガン粒含む
2. 5Y 4/1 灰色 細砂（中粒含む）マンガン粒含む
3. 5Y 5/2 灰オリーブ色 極細砂～細砂（中砂含む）マンガン粒含む
4. 2.5Y 5/2 暗灰黄色 細砂～中砂 ベースブロック混入
5. 10YR 4/3 にぶい黄褐色 シルト質極細砂 ベースブロックを含んだラミナ状堆積
6. 2.5Y 7/3 淡黄色 細砂 ベースブロックを含んだラミナ状堆積
7. 10YR 4/2 灰黄褐色 シルトまじり細砂 ベースブロック、炭含む
8. 2.5Y 6/2 暗灰黄色 シルトまじり極細砂 ベースブロックを含んだラミナ状堆積
9. 2.5Y 7/4 浅黄色 シルトまじり極細砂 ベースブロックを含んだラミナ状堆積

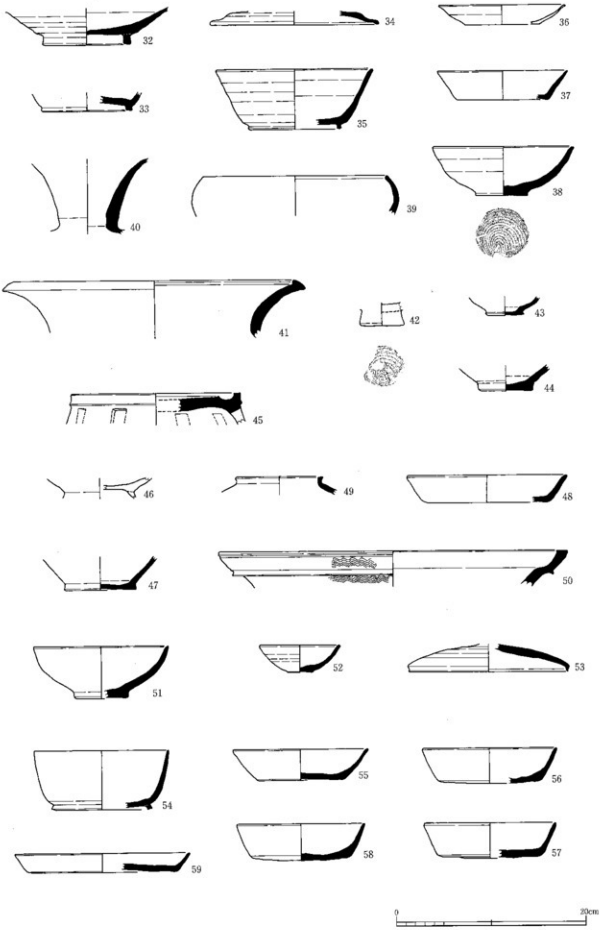
1. 5Y 6/1 灰色 細砂（中砂含む）ベースブロック、少量のマンガン粒含む
2. 7.5Y 6/1 灰色 極細砂～細砂（中砂含む）ベースブロック、少量のマンガン粒含む
3. 2.5Y 5/1 黄灰色 シルトまじり細砂（中砂含む）ベースかブロック、少量のマンガン粒、かレキ含む



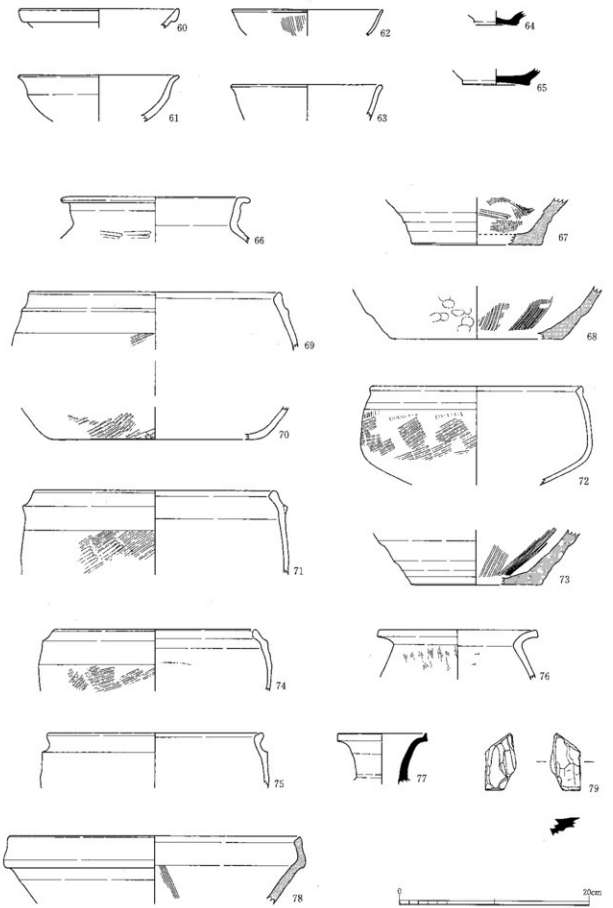
弥生時代の遺構出土土器



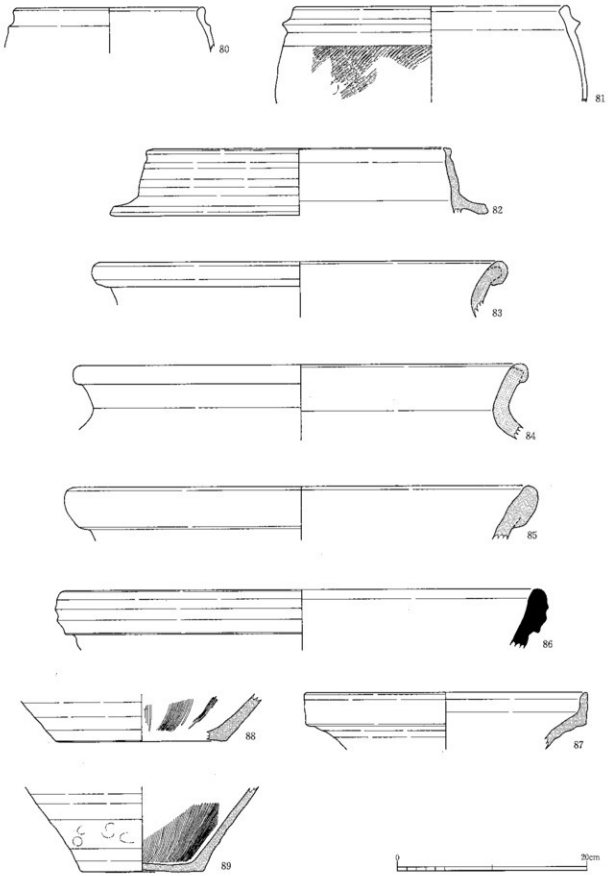
奈良～平安時代の遺構出土土器①



奈良～平安時代の遺構出土の土器②

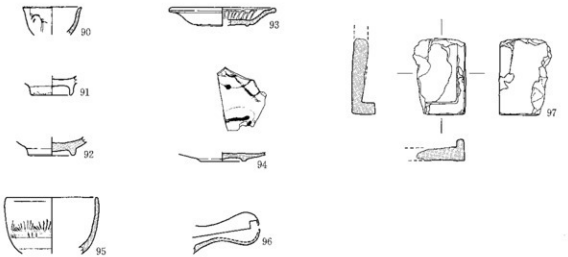


室町～戦国時代の遺構出土土器①

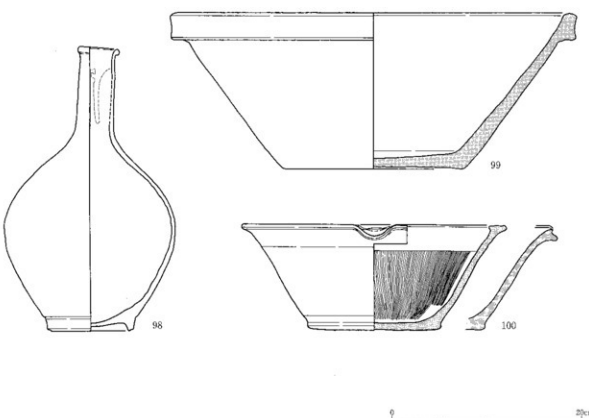


室町～戦国時代の遺構出土土器②

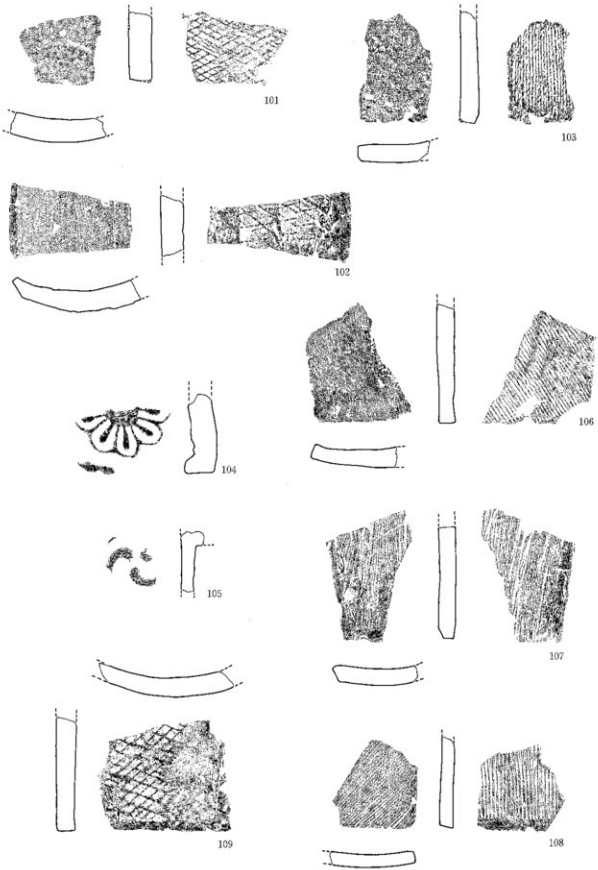
図版30



室町～戦国時代の遺構出土土器③

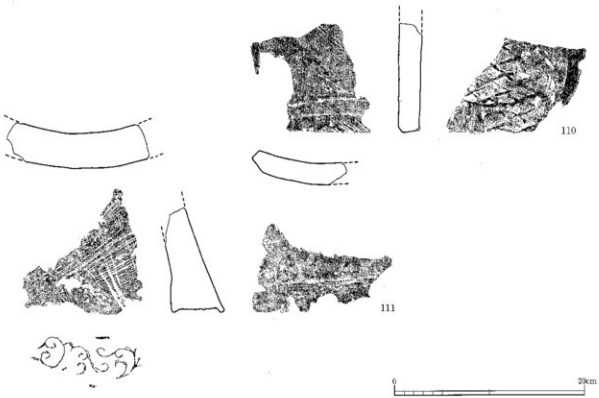


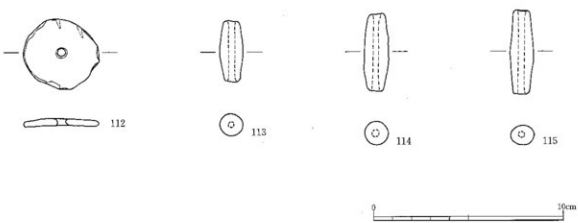
近世以降の遺構出土土器



出土瓦①

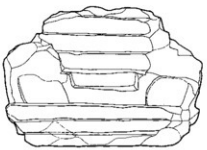
図版32

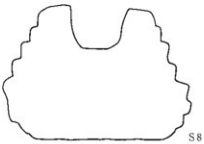


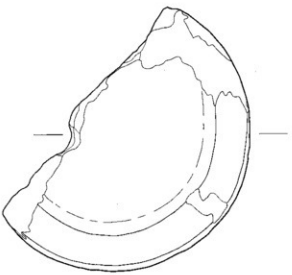


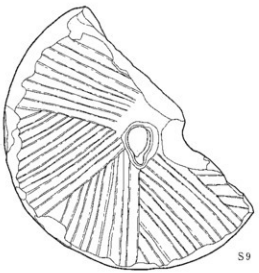
出土瓦②・土製品

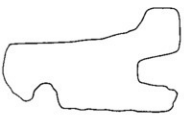
石製品①



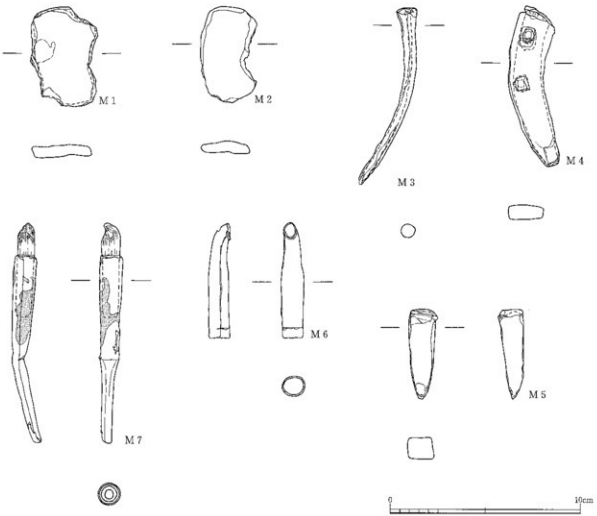








石製品②

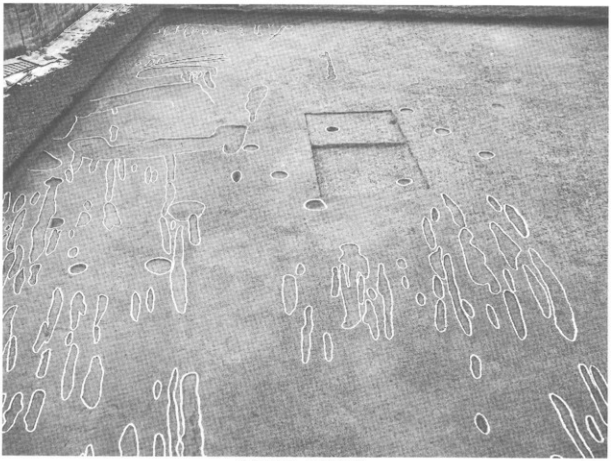


金属器

写真図版

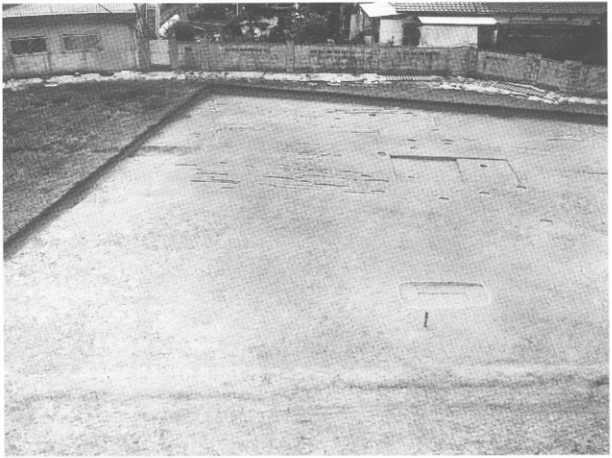
遺跡周辺遠景（北側上空から）

遺跡周辺遠景（南側上空から）

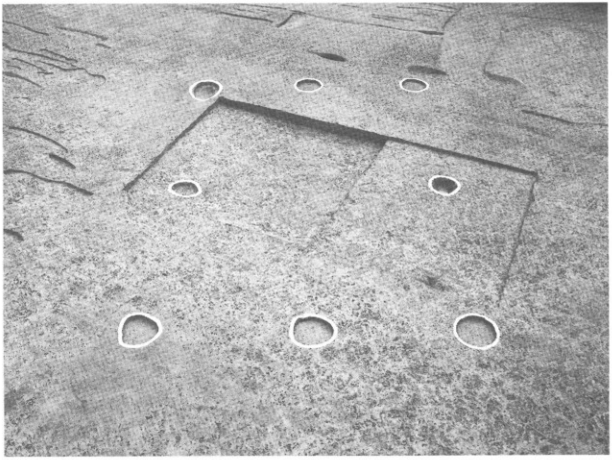


調査区全景（南東から）

調査区全景（北西から）

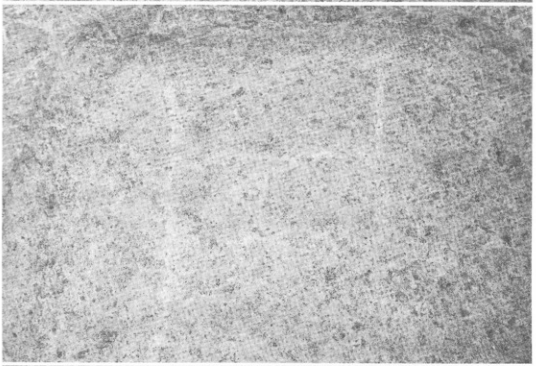


調査区全景（北東から）



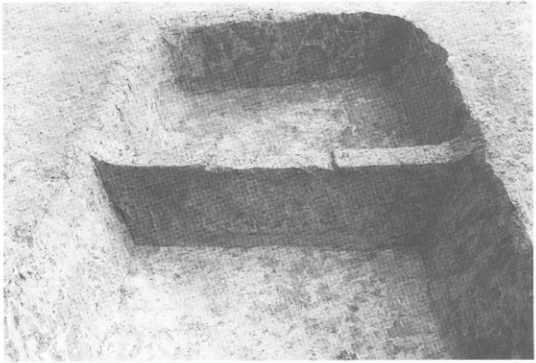
S B01　全景（北東から）

ＳＸ01検出状況
（南西から）

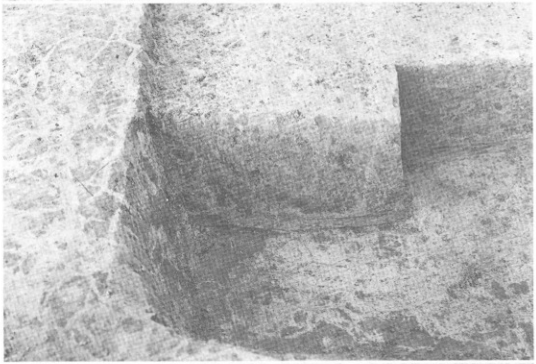


ＳＸ01南東側小口部検出状況
（北西から）

ＳＸ01掘削状況
（南西から）



ＳＸ01横断面
（北西から）



ＳＸ01北西側縦断面
（南西から）

ＳＸ01南東側縦断面
（南西から）

遺跡遠景（北側上空から）

遺跡遠景（西側上空から）

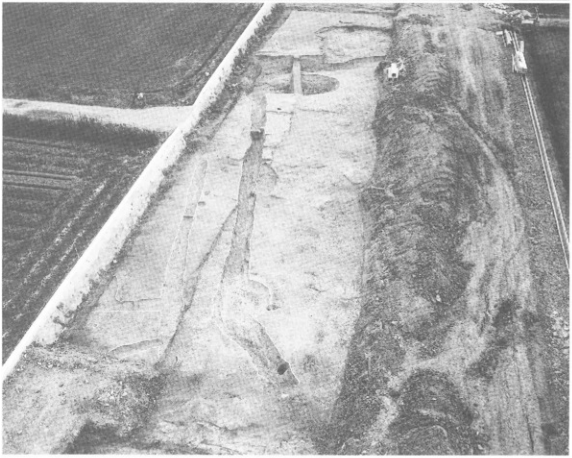
遺跡近景（南側上空から）

遺跡近景（北側上空から）

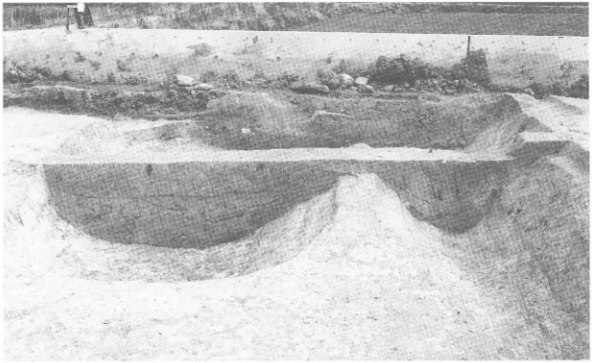
B区　全景（南から）

B区　柱穴列　断ち割り状況

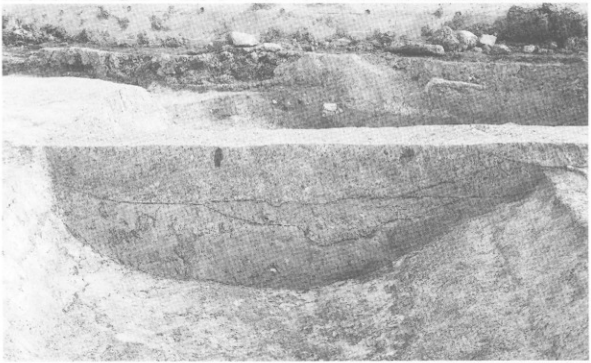
B区　全景（北から）



B区　北半部（北から）

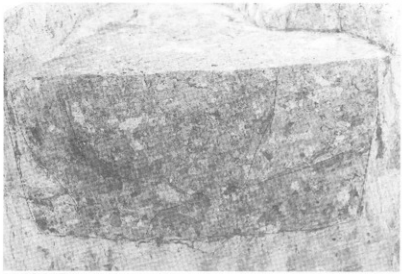


B地区
SD06・SD10畦
D－D'断面
（西から）

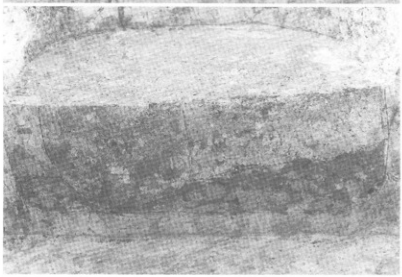


B地区
SD06畦
D－D'断面
（西から）

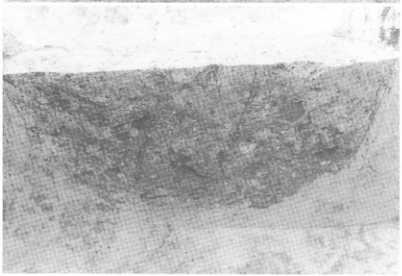
B地区
SD06
E－E'
断面
（東から）



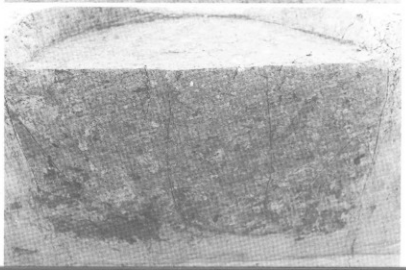
B区　柱穴列（P１）断ち割り



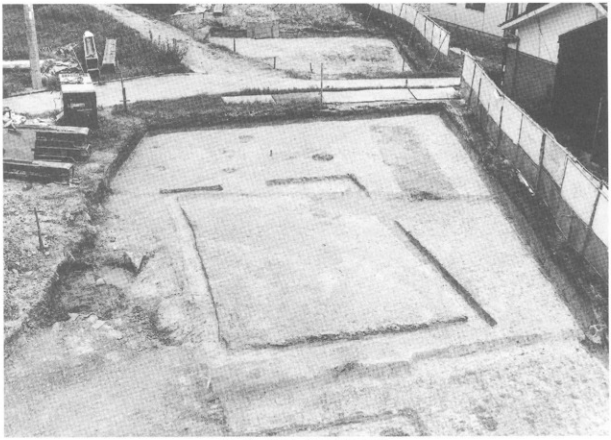
B区　柱穴列（P２）断ち割り



B区　柱穴列（P３）断ち割り

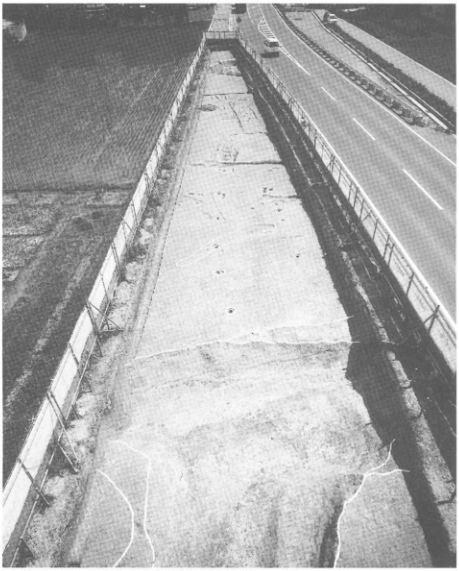


B区　柱穴列（P４）断ち割り



C－24～28区　全景（南から）

C－24・25区　全景（北から）

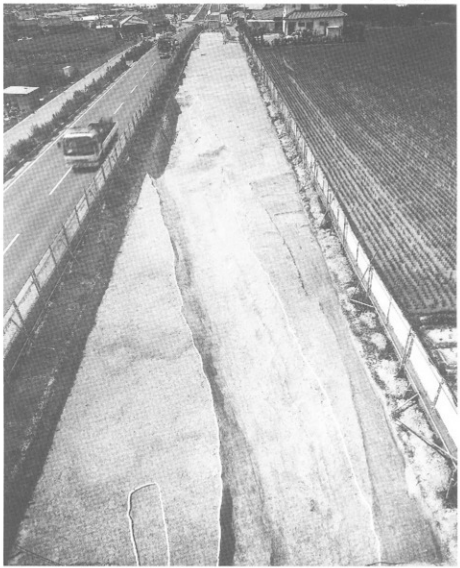


A－1～7区部分　全景
（南から）

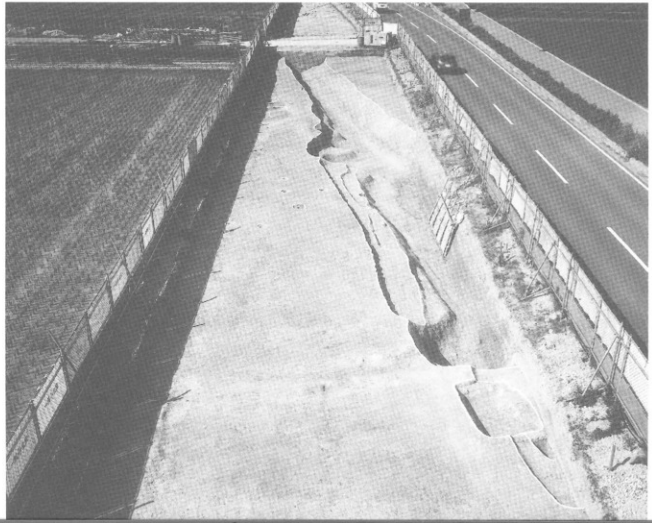
A－5～18区部分　全景
（北から）

A－1～4区　近景（南から）

A－4～7区　近景（北から）

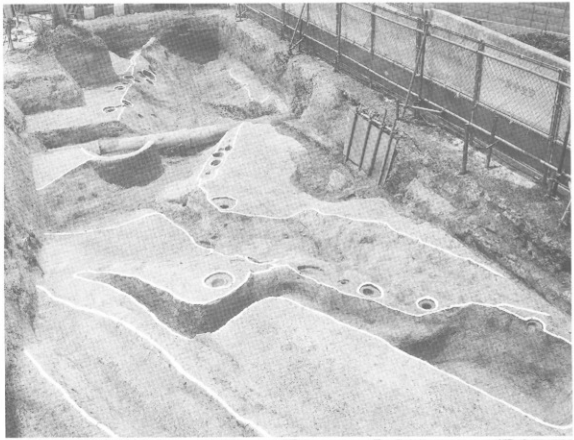


上：A－7～18区　全景（北から）
下：A－7～16区　全景（南から）



A－14～18区　全景（南から）

A－22～28区　全景（北から）



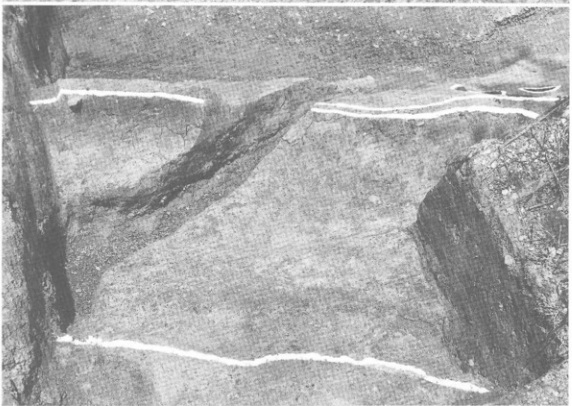
A地区
ＳＤ01・02
（北東から）

A地区
ＳＤ01断面
（北東から）

A地区
ＳＤ01畦
断面
（北東から）

A地区
ＳＤ01土器出土状況

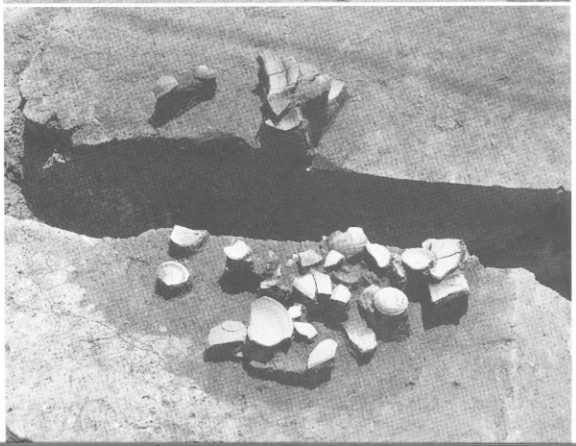
A地区
ＳＫ01畦断面
（南西から）



A地区
ＳＫ01
（南から）

A地区
ＳＫ02断面
（南から）

A地区
ＳＫ02完掘状況
（南から）

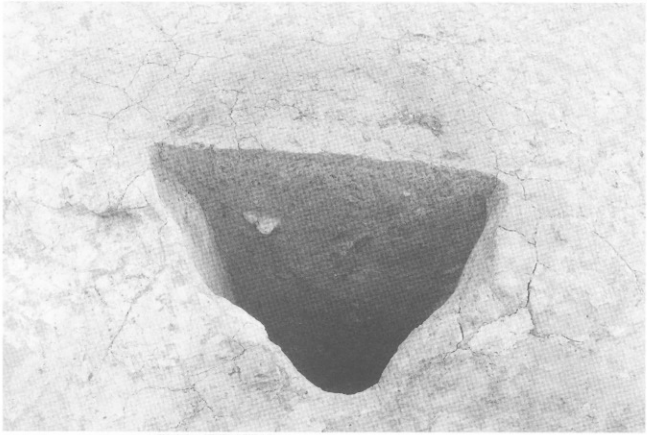


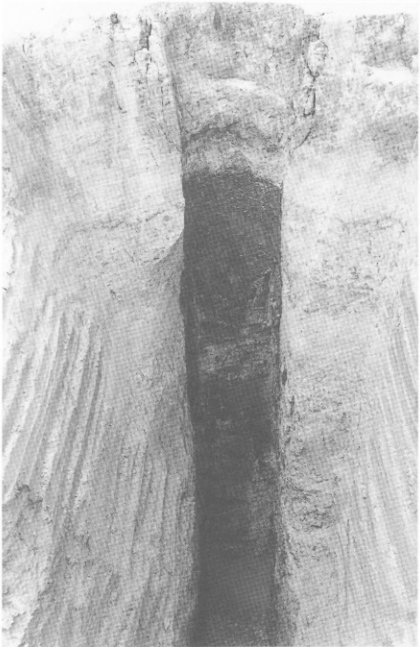
A地区
ＳＫ03土器出土状況
（西から）

上：A地区　SD03完掘状況（北東から）
中：SD03畦a－a'断面（南から）
左下：SD03畦b－b'断面（南から）
右下：SD03畦c－c'断面（南から）

ＳＫ12・ＳＡ01検出状況
（南から）

ＳＡ01　検出状況
（北から）

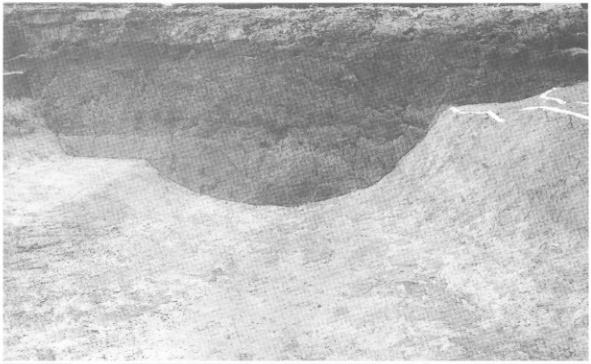




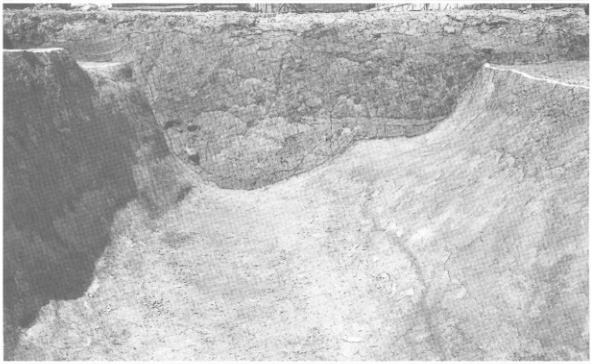
上：A地区　SK12検出状況（南から）
下：SE01断ち割り状況（南から）

A地区　ＳＤ06完掘状況（北から）

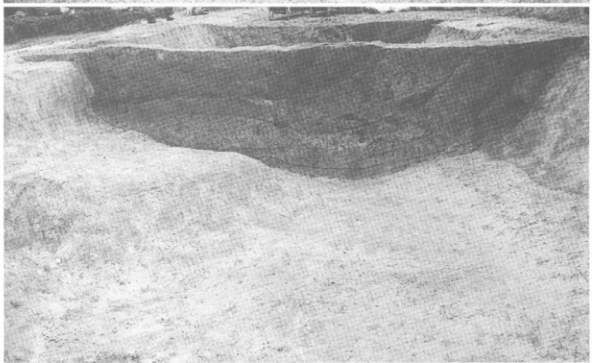
A地区　ＳＤ06完掘状況（南から）



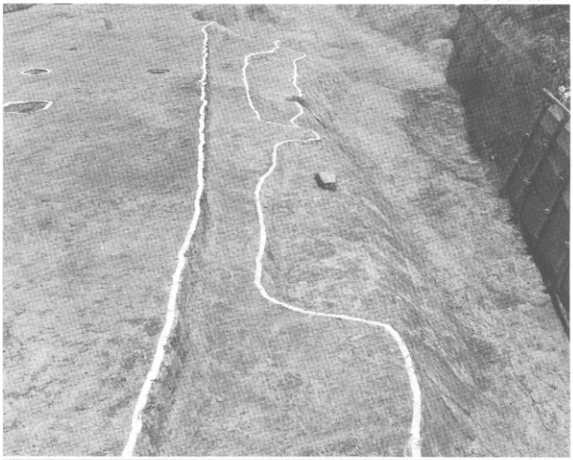
A地区
ＳＤ06Ａ－Ａ'断面
（北から）



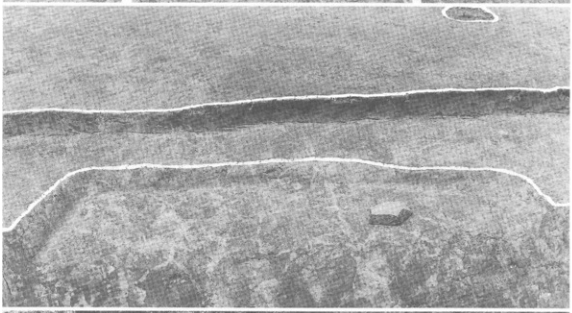
A地区
ＳＤ06Ｂ－Ｂ'断面
（南から）



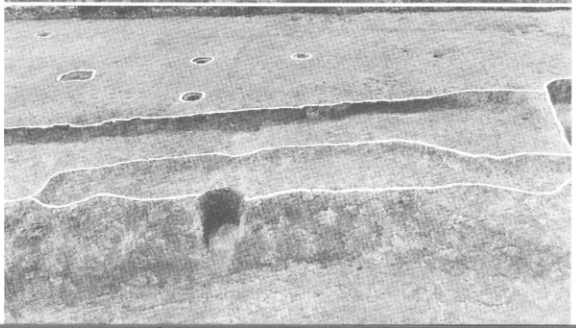
A地区
ＳＤ06畦Ｃ－Ｃ'断面
（南から）



A地区
SD06内
SX01・02検出状況
（南から）

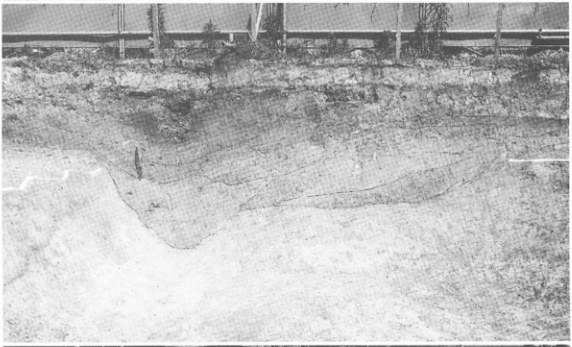


A地区
SD06内
SX01
（東から）



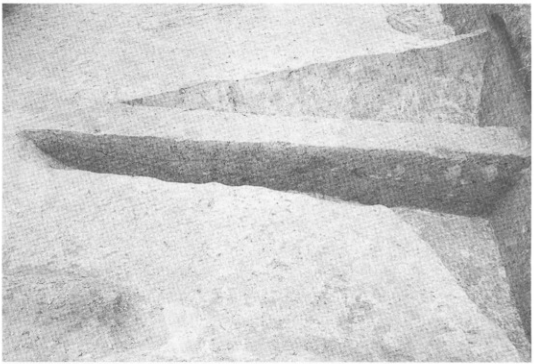
A地区
SD06内
SX02
（東から）

A地区
ＳＤ10完掘状況
（南から）

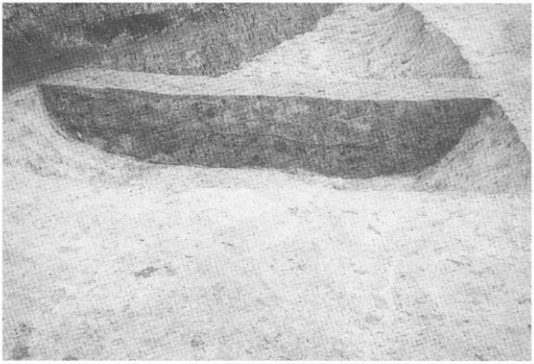


A地区
ＳＤ10断面
（西から）

A地区
ＳＤ10断面
（東から）

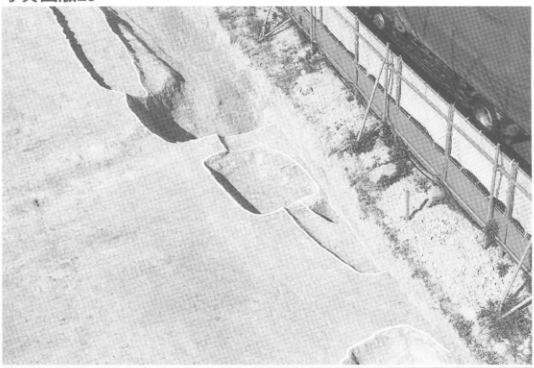


A地区
ＳＫ07畦断面
（南から）

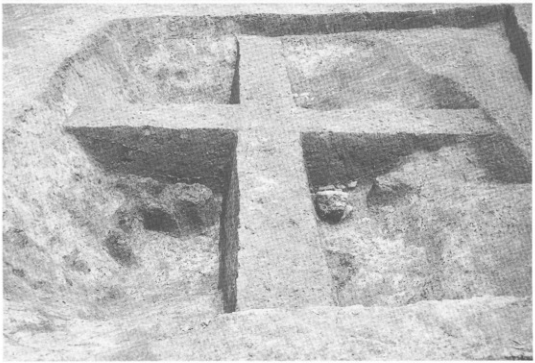


A地区
ＳＫ08畦断面
（北から）

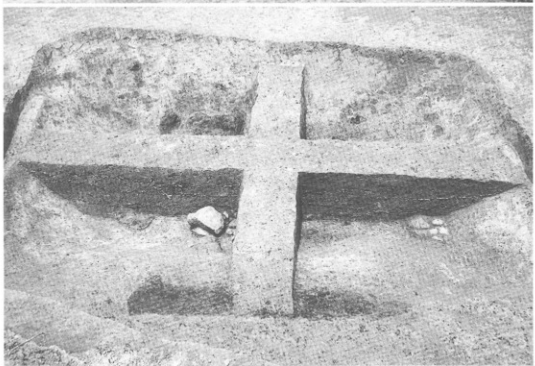
A地区
ＳＫ13畦断面
（南から）



A地区
ＳＤ06南側土坑群
（南西から）



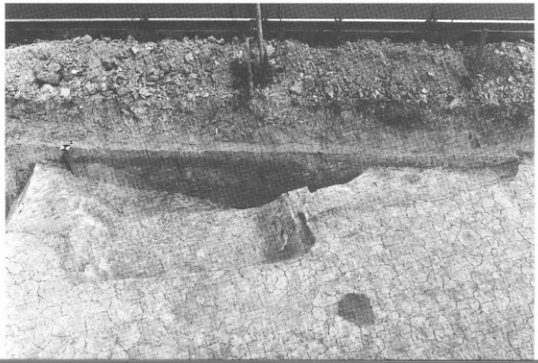
A地区
ＳＫ09畦断面
（南から）



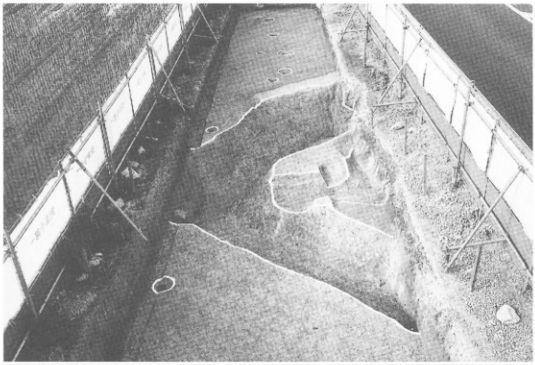
A地区
ＳＫ09畦断面
（東から）

A地区
ＳＫ09礫・炭集積状況
（西から）

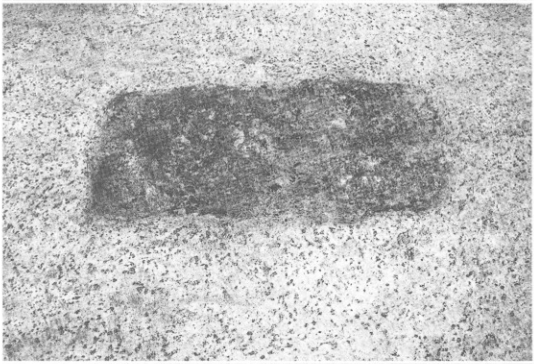
A地区
ＳＫ09完掘状況
（西から）



A地区
ＳＫ10完掘状況
（西から）



A地区
ＳＤ07・近世水路
（南から）



A地区
ＳＫ14検出状況
（南から）

A地区
ＳＫ14完掘状況
（西から）

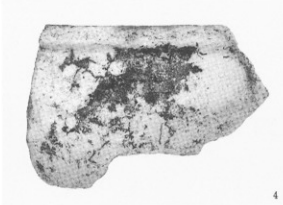
A地区
ＳＤ06完掘後の１コマ

A地区
現地説明会風景

A地区
現地説明会当日の１コマ

1

2


4

6

3

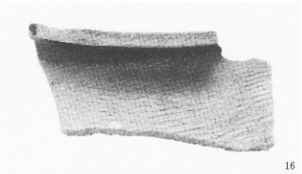
5

7

弥生時代の土器

8

11


16

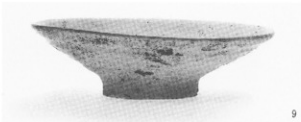
19

21

22

23

24


9

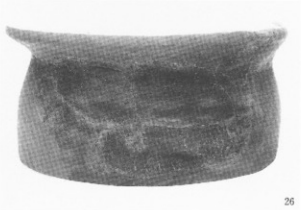
10

17

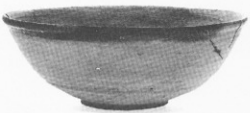
18

20

25


26

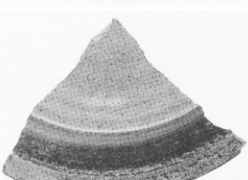
奈良～平安時代の遺構出土土器①

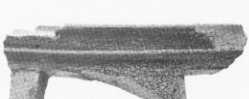

27

28

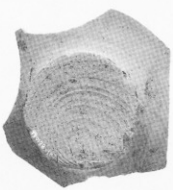
29

38




45

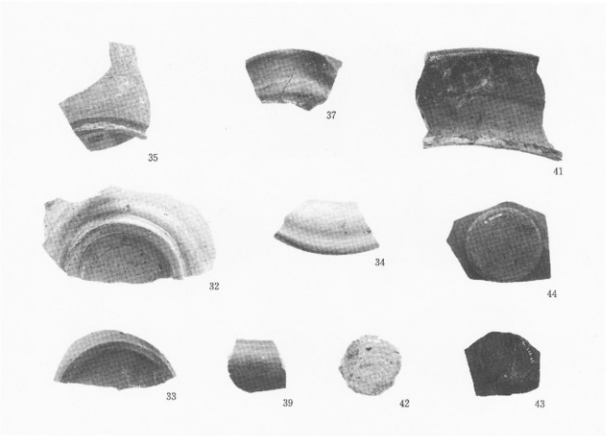
31


30

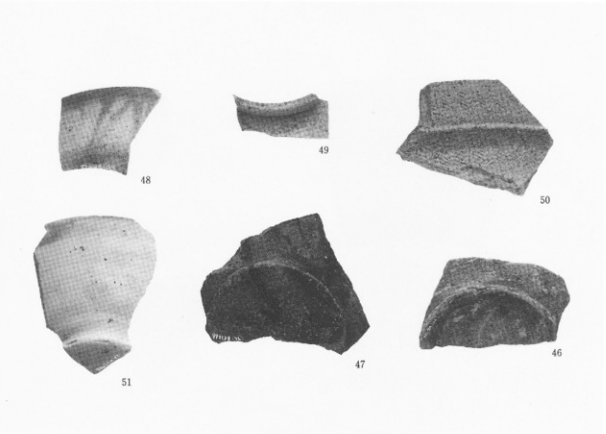
40

53

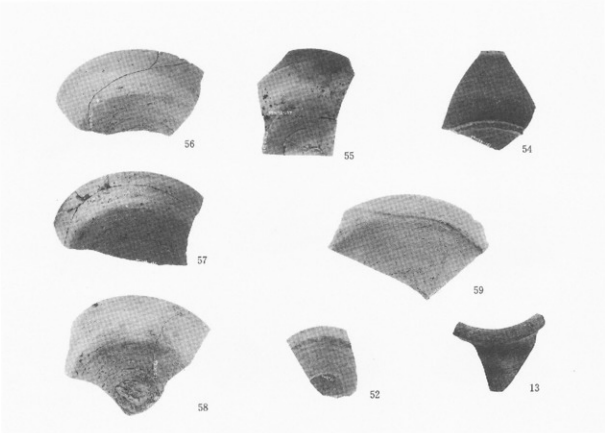
奈良～平安時代の遺構出土土器②



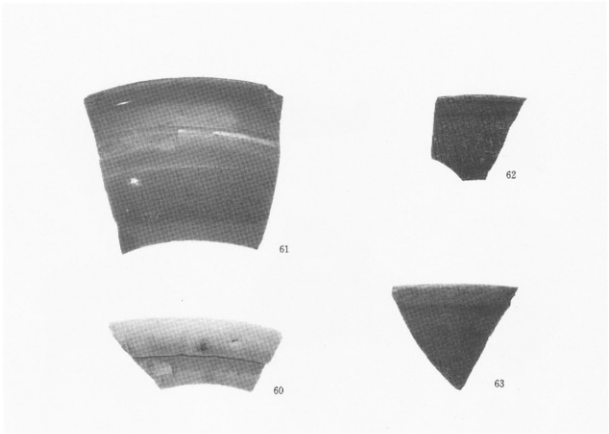
奈良～平安時代の遺構出土土器③



奈良～平安時代の遺構出土土器④



奈良～平安時代の遺構出土土器⑤

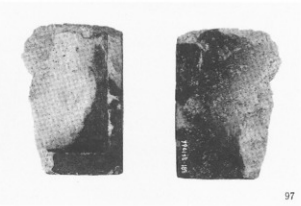


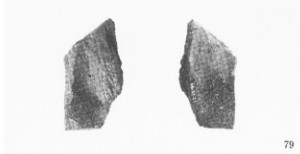
室町～戦国時代の遺構出土土器①

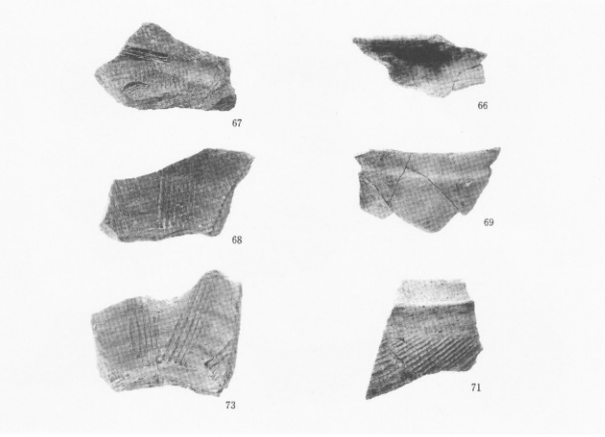
72

77

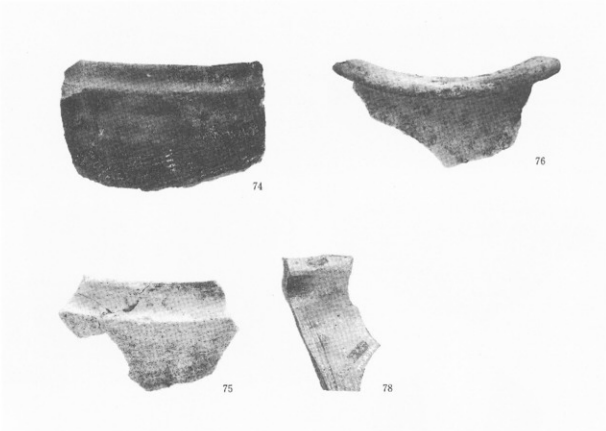
81


97

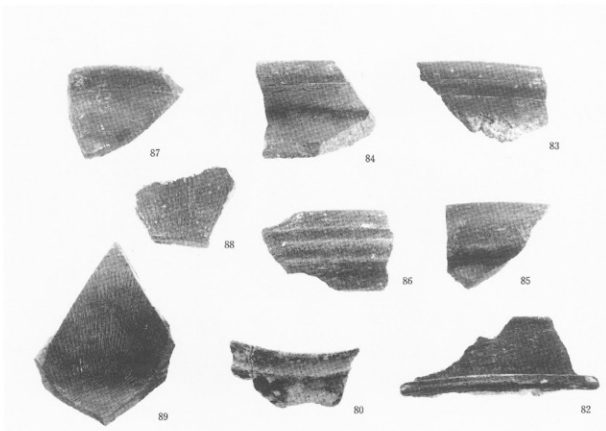

79



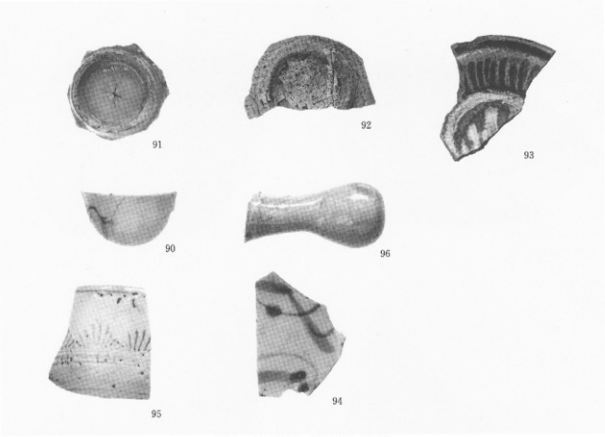
室町～戦国時代の遺構出土土器②



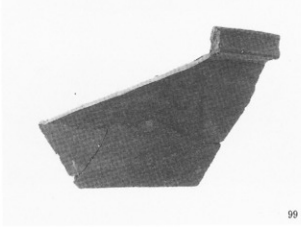
室町～戦国時代の遺構出土土器③



室町～戦国時代の遺構出土土器④



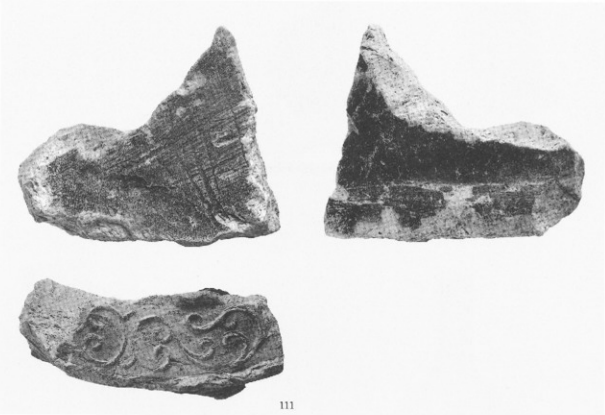
室町～戦国時代の遺構出土土器⑤



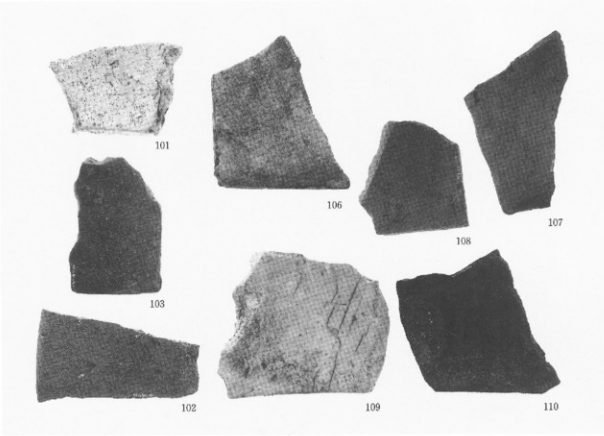
近世以降の土器

104

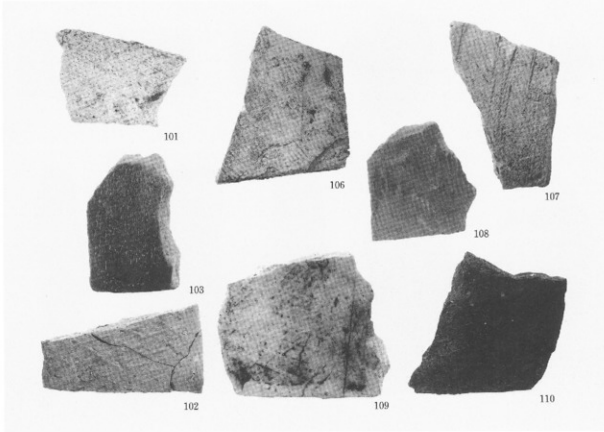
105



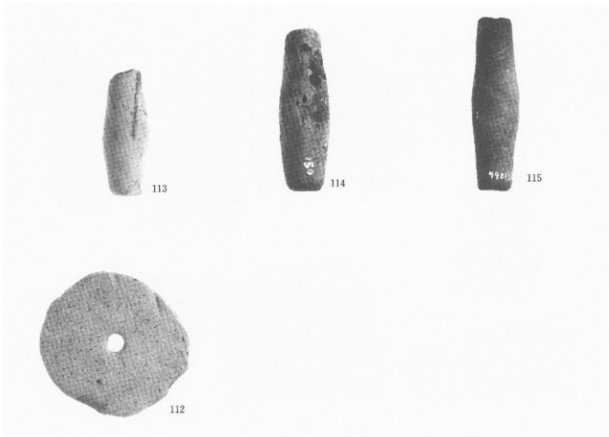
111



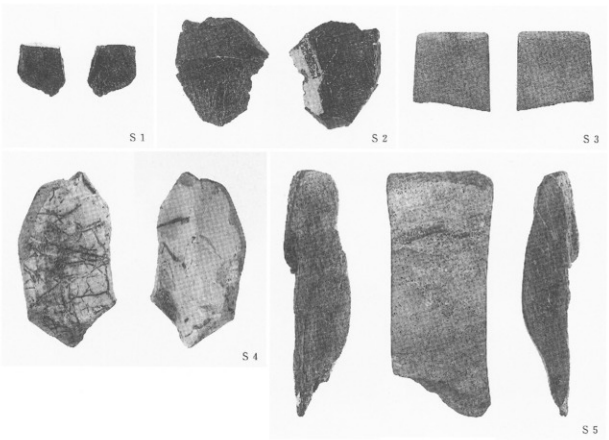
瓦②（平瓦：表）



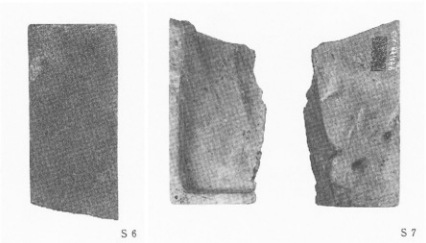
瓦②（平瓦：裏）



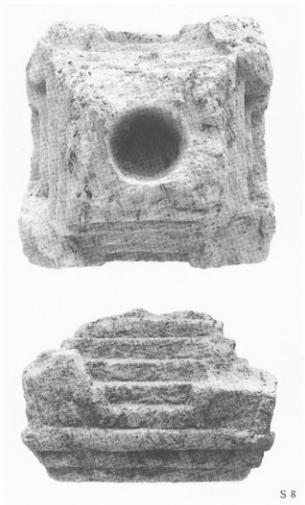
土製品



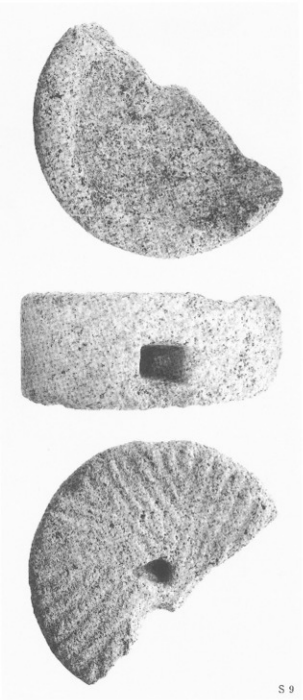
石製品①



S 6　　S 7

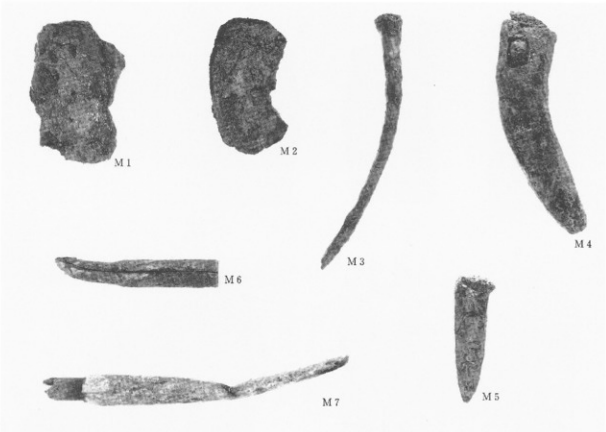


S 8



S 9

石製品②



金属器

報告書抄録

ふりがな	きたただに・なかにしだいちいせき
書名	北谷・中西台地遺跡
副書名	（主）高砂北条線道路改良事業に伴う発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第255冊
編著者名	中川　渉・中村　弘・深江英憲
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
所在地	〒652－0032　神戸市兵庫区荒田町２丁目１番５号　　TEL　078－531－7011
発行年月日	西暦2003（平成15）年３月20日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
北谷・中西台地遺跡	ひょうごけんかこがわ 兵庫県加古川 し　ひがしかんきちょう 市東神吉町神 かんきほか 吉　他	28210	本文第１章参照	34度 47分 38秒	134度 49分 41秒	本文第１章参照		（主）高砂北条線道路改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北谷遺跡	集落・墓	奈良～平安	溝・掘立柱建物・木棺墓	土器・金属器	
中西台地遺跡	集落	弥生 奈良～近世	溝・土坑・柱穴列	土器・石製品・金属器	中世居館跡に伴う堀跡

兵庫県文化財調査報告　第255冊

北谷・中西台地遺跡

(主)高砂北条線道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

平成15(2003)年３月20日発行

編　集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
神戸市兵庫区荒田町２丁目１－５
〒652-0032　TEL（078）531－7011

発　行　兵　庫　県　教　育　委　員　会
神戸市中央区下山手通５丁目10－１
〒650-8567　TEL（078）341－7711

印　刷　光　印　刷　株　式　会　社
神戸市中央区下山手通２丁目16－12
〒650-0011　TEL（078）321－1551㈹